

歴史小説を読んでいると、「フィクションには興味がないのだよ、事実だけが知りたいのさ」と兄が言った。

しかし事実が書かれた歴史書なんて存在するのですか？見た事をありのままに書くなんて不可能だし、写真も動画も簡単に改ざんすることができるし、そうすると自分で実際に見たものしか信じられないようになるとか言うけど、そもそも見えているものが本当かどうかはもはや分からない世界になっているし、そう考えると見ている自分の感覚すらおかしいような気になってきて、自分というものが信じられなくなる。現に僕には兄なんて居ない訳だし…

～チラシより～

今年は2月に「鹿」で劇王、3月に「日本語私辞典」で若手演出家コンクール2011最優秀賞を（ちなみにこの「日本語私辞典」は東京でしか上演していないので7月くらいに名古屋でも）、4月に「豆」を上演して、これが先月のAAF戯曲賞で大賞受賞、「トラックメロウ」で韓国公演も出来ました。これも全ていつも一緒に居てくれる劇団員と、劇場に足を運んで頂いているお客様あっての事でございます。ありがとうございます！…とまあそれにしてもこんなに素敵な事ばかりが続くと、これは夢なんじゃないか、いつかの僕がこうなれまいいなあと妄想した世界なのではなからうか、などと思ったりもするもので…、 、 、 、ふと周りを見回したくなるのです。

～パンフレットより～

登場人物 男1

男2

男3

男4

女1

女2

女3

男1、やってきて舞台のど真ん中に立つ。

男2、やってきてある位置に立ち止まる。その位置に目印として足跡を残してもいいし残さなくてもいいが、残した方が親切かもしれないとも思うので今回は残すことにする。足跡A。

男2 昨日さ、家の前の通りをさ、はず向かいの家んとこの子供が仮面ライダーオーズのベルト巻いて歩いてるんだ。隣にあれ父親だな、居てさ、誕生日プレゼントかな、買って貰ったんだきつと。だけど

あのお父さん、今仮面ライダー何やってるのか知らないんだなあ。ちよつと調べれば分かる事なのにないんだよ。どうしようもないよなあ。

男1 良く売ってたね、オーズのベルト。

男2 前に買ってた奴を渡しそびれてたんだ。今頃あげてさ、子供の方もお父さんの顔色見てさ、喜んであげてさ、健気だよね。大人は子供が気遣ってる事気づいてないんだよな基本バカにしてるから。

男1 どうして今まであげなかったんだろ、オーズやってたのもう二年前でしょ？

男2 離婚したんだよあそこの夫婦。その後家の前までガキ送って、父親の方は車に乗って帰ってた。

男1 そうなのか。

男2 あのベルト捨てるな、きつと。だって今頃オーズのベルト巻いてもさ、メダルなんか売ってないしさ。こみ袋に入れて燃える。こみの日に出てたら僕拾って来ようかな。松尾好きだろ？オーズ。

男1 好きだよ。だけどせっかくお父さんに買ってもらったんだ、大事にしておくときつと。

男2 何年かに一週思い出したようにああやってプレゼント持ってくるんだ。父親の自己満足に付き合

されてる子供の身にもなれって言うんだよまっく。

男1 忙しいんだよきつと。わざわざ会いに来てくれるんだから優しいお父さんじゃないか。大変なんだよ、大人は大人でさ。

男2 なんだよお、大人の気持ちなんか知らないくせに。

男1 へへ、

男2 気持ちワリ、笑うなよ。

男1 そうやってさ、いろんな事があつてさ、それでもみんな生きてるんだなあ、現実をさ。

男2 君大丈夫かい？また意味も無くグルグル回って目回したんだろ。あれ止めた方がいいよ、脳みそに悪いと思う。

男1 僕ね、実はずっと前から思ってたんだ、この世界は、本当の世界じゃなくて、作られた世界なんだ。僕の周りに居る人も、見えている景色も、全部僕の為に作られた物なんだ。本当の世界は向こう側にある。そうなんじゃないかと思っていたんだけどやつと確信に変わった。

男2 ねえねえ松尾

男1 なんだい田中。

男2 そいつは危ないぜ、危ない感覚だぜ。君はこつちの世界に現実感が無いんだろ、そいつは危険だ。何やってたって現実じゃないんだもの、なんだってやれるじゃないか。

男1 そうだよ。

男2 だからダメなんだよ。そうならもうダメだよ。お父さんとお母さんに相談した方がいいよ。

男1 したって無駄だよ、こんな話信じてくれる訳ない。

男2 僕だって信じないよ。あーあ、松尾はついに変になっちゃった。

男1 変じゃないよ、僕はいたって冷静に世界を見つめているんだから。

男3、やって来てある位置で立ち止まり、足跡Bを残す。

男2 あ、あれ先生だ。行こう。こんな話聞かれちゃまずい。

足跡Bは【先生】だった。男3はそのまま何事もなく去る。

男1 昨晚の事さ、寝てたらさ、僕、向こう側の世界が見えちゃってね。
男2 向こう側の世界？

男1 向こう側の世界では僕、どこかの工場で働いてるんだ。凄い音がしてた、ガンガン、うるさかった。
男2 ああ、そう。

男1 もう大人だった。髭も生えてた。毎日毎日ああやって働いてるんだ。頑張ってたなあ僕。

男2 つまんない夢。

男1 夢じゃないよ。

男2 夢だよ。

男1 夢じゃない。

男2 だって寝てたんだろ？夢だよ。

男1 寝てない。

男2 寝てたって言ったろ。

男1 寝てるんだけど、寝てない。目つぶってたただけだから。

男2 それ寝てたんだよ。目つぶって布団入ってたら勝手に寝るもん。

男2、のんびりその辺を歩いている。男1は始めの位置から動いていない。

男1 やっぱりそうだな、こっつて見ていると、もうそつとしか思えない。

男2 百歩譲ってさ、それが夢じゃないとするよ。

男1 夢じゃないよ。

男2 なあ松尾、そしたらお前さ、そつちの世界に帰りたいのかい？

男1 全然。

男2 そうだよな、だってそんなうるさい工場で働く大人になんて、なりたくないもんな。

男1 そんなこと無いよ。あれだって立派な仕事だよ。きつと、何か凄く大切な物を作っているんだと思う。
う。

男2 違うね、逃げて来たんだね。こんな世界嫌だって、こんなの本当の僕じゃないって「逃げて来たんだね」
だね。

男1 そんな事ないよ。僕はね、こつちの世界でも大人になつたらあんな大人になりたいと思うよ。

男2 強がり言つたら。

男1 強がりじゃないもの。

男2 じゃあなんの為に向こうの君はこつちの世界を作ったんだい？現実の世界に不満があるからじゃないのさ。

男1 僕ね、ゲーム好きでしょ？

男2 知らねえよ。

男1 だからゲームやってるんだと思う。

男2 ゲームかよ。

男1 世界を作るシミュレーションゲーム。

女2、やってきて、ある位置(足跡C)で立ち止まり、歩き去る。

男2 君ね、さっきからひどい事言ってるんだから気づいてくれよ。だってそつたら、そんな事言つたら今こっつて話している僕も君の作ったゲームのキャラクターって事になつちまうじゃないか。それはこ

免だよ。冗談じゃないよ。

女3、やってきて、ある位置(足跡D)で立ち止まり、歩き去る。

男1 ごめん。ごめんなさい田中。

男2 ううん、分かってくればいいんだけどね。

男1 でもそれはもうしょうがないんだ、ごめん。

男2 …あのね、僕には僕の気持ちがあつて、勝手気ままに動いてるんだからさ。お家があつて、家族があつて、ご飯食べて、学校行ってる。

男1 学校行ってるの田中？

男2 行ってるよそりゃあ学校くらい。

男1 田中達に通う学校？

男2 そうだよ。

男1 知らなかった、猫にそんな学校があるなんて。

男2 お前、猫社会バカにすんなよ。

男2が最初に残した足跡Aは【猫】だった。

男1 ほらね田中、やっぱりそういう事なんだ。そんな猫の学校なんてある訳ないし、そういう非現実的な事は全て僕の世界の中で作られたものなんだ。君は勝手気ままに動いてるつもりでも、それはもうプログラミングされての行動なんだ、ごめん。

男2 もうね、怒るよ。

男1 怒ってもいいよ。

男2 …。キーン！

男1 いいよ。

男4、やってきてある位置(足跡E)に立ち止まり、走り去る。

男2 やれやれ。

男1 そもそも君が僕と話している事だって不自然な事じゃないか、うん。

男2 ねえそれってさ、どんなゲーム？

男1 そっだな…

男2 知らないの？

男1 ざっくり言うと、僕の理想とする世界を作るのさ。

男2 ざっくりしてんなあ。

男1 具体的な事はこれから決めて行く。僕はまた小学生だもの、今ここで判断するのはどうかと思う。

男2 魔法とか使えないの？魔法使いたい。

男1 うん、僕も魔法は使ってみてもいいとは思ってる。

男2 使ってみて。

男1 いいよ。

男2 うん！

男1 いいんだけど、魔法使っちゃおうとそういう世界になっちゃおうでしょ。

男2 ？

男1 バトル的な事が発生するでしょ？

男2 仮面ライダー好きだろ？

男1 好きだけど、なりたくはない。見てたいだけ。

男2 ああ、そう。

男1 魔物が出てくるし、怖い。

男2 魔法使いたいよ僕。

男1 田中は使えないよ。

男2 なんてだよ。

男1 魔法使えるのは僕だけ。

男2 ひでえわがままな世界だな。

男1 でももっと違うジャンルの、ないかなあ。あ、もう暗くなる。帰らなきゃ。お母さん、今入院してんだ。

男2 病気？

男1 分かんない。

男2 そう。

男1 ねえ田中。

男2 ん？

男1 僕ね、頑張るよ。

男2 何を？

男1 頑張る。この世界を、頑張って生きて行く。

男2 うん。

男1 だから君も、頑張るよ。

男2 …うん。

男1 これからいろいろ迷惑掛けるかもしれないけど、頑張るってこの世界をやっつけていってね。

男2 …いや、うん、頑張るよ。

男1 はい！

男2 いや頑張ってるんだよもう、僕は僕で、頑張ってるんだよ。

男1 何か不便な事あったら言っただけ、やれるだけの事はやるから。

男2 ああ、そうかい。

男1 うん。

男2 じゃあき、この寒いのかなんとかならない？

男1 なんかに着たら？

男2 そういふ事じゃにやいだろ。

男1 …。

男2 そういふ誰でも出来る事じゃなくてさ、君しか出来にやい事やってよ。

男1 … (失笑している)。

男2 何笑ってんだよ。

男1 いや、急に猫語になったなと思って。

男2 そりゃ出るよ、たまには。

男1 もったつ出したよウチ、来るかい？

男2 怒られるんだよこたつ入ると。

男1 めぐみちゃんですよ、それは僕にはどうしようも出来ない。

男2 なんだよ、君の世界だったらなんとかしてみせてくれよ、冬を無くすとかさ。

男1 めぐみちゃんは従姉弟だし、僕こゝろ見えて冬も好きなんだ。

男4 やつてきて、ある位置(足跡F)で立ち止まり、

男4 おい、松尾、産まれたぞ。

男1 ホント？

男4 女の子。大きいぞ。

男1 女の子か。

男2 ああ、それでお母さん入院してんだ。

男4 どっちに似てると思っ？

男1 どっちに似てるの？

男4 (ニヤッと笑う)。

男1 教えてよ。

男4 見てのお楽しみだ。行くぞ(歩きたす)。

男1 待ってよお父さん。

足跡Fは【父】のようだ。

男2 君、お父さんにも松尾って呼ばれてるのかい？(去る)

女1は足跡G／【妹】の位置に、女2は足跡H／【看護師】の位置にやってくる。

女2 まだ、麻酔が切れてませんから。

男4 赤ちゃん、見ていいですか？

女2 どうぞ。

男1 ねえお父さん、麻酔？

男4 うん、手術したからね、お母さん。

女1 …。

女2 寝てますね。

男1 …ちっちゃ。

女2 これでも大きい方なの。

男4 うん、四〇〇グラムは大きいですよねえ。

女2 そうですわね。

男4 どうだ松尾、妹だぞ。

男1 …うん。

男4 どうだ？

男1 なんか…、おじさんみたいだなあ。

女2 そう…、叔父さんに似てるの。そういう事、お父さんの前で言っちゃダメだからね。お父さん、悲しむから。

男4 ここに居ますよ。

女2 (男4を見る)。

男4 子供になに教えてるんですか。

女2 叔父さんって、お父さんの兄弟であるところの叔父さんとは違うのよね？

男4 まったく、ひどい看護師だなあ。

男1 ……しわくちや。女の子か。

女2 松尾君、しわくちやおじさんは、おじいさん。

男4 どっちでもいいですよっつ。

女2 あと、女の子だからね。ダメ、おじいさんなんて言っちゃ。

男1 僕、弟がお兄ちゃんが欲しかったんだ。

男4 松尾、お兄ちゃんはまだ無理なんだ、ごめん。

女2 妹もかわいいわよきつと。

男4 そうだよ、妹の方がかわいいぞ。

男1 キャッチボールとか、やりたかった。

女2 女の子でもするよ、お姉さんしてたよ、キャッチボール。

男1 やっぱ男の筋力にはかなわないでしょ？

女2 筋力期待されてもなあ。そんなにハードな遊びがしたいの？

男1 だって、お互い切磋琢磨して甲子園行きたい。

男4 お前甲子園目指してるのか？

男1 そういふ訳じゃないけど、

男4 そういふ訳じゃないんだつたらそういふ事言わないでくれ。

男1 だって友達みんなそう言ってたから、僕も行きたい。

男4 最近、野球の方が人気あるんだな。

女2 じゃあそろそろ消灯しますね。

男4 あ、はい。松尾、お母さんと一行っつ。

男1 はい。

女2と男4、奥の方へ行き、そこにある位置をじーっと見つめている。

男1は一步も動かず静かに女1を見ている。

男2、【猫】の位置に一旦立ち止まり、

男2 なんて名前？

男1 ……この子はこれから、大きくなって行くんだな、この世界で。こんなに小さくて、こんなに不細工なのに。

男2 なんて名前なんだい？

男1 僕、見つけたよ。

男2 何を？

男1 僕の理想の世界。僕は、愛ちゃんが幸せに生きていける世界を作る事にする。

男2 愛ちゃんって言うのか。

男1 愛ちゃん。愛ちゃん？

女1 ……

男1 お兄ちゃんだよ。

女1 ……

男1 そうだ、餵あげよう。お兄ちゃんが、餵あげよう。

女3、やってきて、足跡I／【伯母】の位置に来ると、

女3 ダメよそんなのあげたら。のどに詰まっちゃっつ。この子泣かないわねえ。おい、おい(あやす、

…うん。松尾、そろそろ(飯食べなさい。今日から学校でしょ。

男1 あ、はい。

女3 めぐみー、あなたも(飯食べなさい。

女2、足跡C／【めぐみ】の位置に移動して、

女2 はい。松尾、お前何やってんだよ、ぼけーつとしてんじゃねえよ。食うぞ、めし。お前、納豆食

えよ。納豆食うとな、力が出るつて言つたつたぞガンデン。

男1 ガンデンつて？

女2 岩田だよ。

男1 岩田…？

女2 お前岩田知らねえの？クラスで一番足の速い岩田だよ。

男1 岩田君は知ってるよ。でも、どうしてカンデン？

女2 はあ？

男2 漢字は苦手なんだよな。

女2 お前なに？いじめられてるの？

男1 え？

女2 いじめられてるなら言えよ。

男1 今日は、お母さんのお葬式が終わったので、久しぶりに学校に通う日なんだ。

女2、いきなり男2に向かって足をドンってやる。

男2、逃げる。

男4、今まである位置を見つめてじつとすくまっていたが、ようやく立ちあがり、

男4 じゃあすいません、行って来ます。

女3 はい。

男4 愛ちゃん、お父さん行って来るねえ。

女1 …。

女2 (男2を追いかけて行き) 愛ちゃんに汚ねえバイキン持ちこんだらお前マジで去勢するぞー！

男1 めぐみちゃんたら。

男4、歩き去る、と思いきや、

男4 ただいま。

女3 お帰りー。

男4 愛ちゃん、ただいま。

女1 …。

男4 なんかすいません。

女3 何言ってるの、ご飯食べなさい。

男4 はい。

女2 お帰りー。

男4 ただいま。(男1に) ただいま。

男1 お帰りなさい。

女2 松尾、飯食つとけ。

男1 うん…。

男4 お義姉さん、

女3 ん？

男4 そろそろ空き、みつかりそうなので、

女3 ああ、そう。

男4 すいません、ご迷惑おかけして。

女3 いいのいいの、うちは大丈夫、気にしないで。

男4 すいません。

女3 さ、帰るよー。

女3、去る。

女2 松尾、頑張れよ。

男1 うん…。

男4 ん？

男1 あ、ううん。

男4、足跡E／【岩田】に移動して

男4 お前ホントいい加減にしろよめえ、バカ野郎チビのくせしやがつてくそたわけがあほんだらったく、

おめえが裏で悪口言ってるの知ってたんだからな！

女1、去る。

男1 いや、僕、悪口なんか言ってる
男4 俺の事ガンデンって言い触らしてんのお前だろ、機動戦士ガンデンってめえが作ったんだろ！
男1 いや、え？
女2 おい岩田、お前ちよつとクラスで一番足が速いからって良い気になってんじやねえぞこの野郎
男4 うるせえオトコオンナ、なんでおめえが来んだよ。
女2 うちの松尾はな、本気出したら実際お前より速いんだからな。
男1 めぐみちゃん、ちよつと
男4 だからいつでも勝負してやるって言ってんじやねえかよ、早く来いよ運動場！
男1 ねえどうして僕が岩田君？
男4 てめえこの野郎早く来い！この期に及んでまだ「ちやちや」ってんのかマジでお前の膝小僧スルむけにしてやつからな覚悟しとけよくそたわけがあほんたら、
男1 めぐみちゃん…、
女2 おい岩田、お前松尾に負けたらマジでリレーの選手辞退しろよな。
男4 おうしてやるよ、クラスで一番「しゃねえ」のにリレーに出る訳いかねえもんよお、辞めてやるよ、
女2 騎馬戦出るよ。
男4 騎馬戦でもなんでもやったるわ！
女2 騎馬戦の下の奴な。
男4 分かったわ！
女2 後ろの、目立たない方。
男4 なんでもええわ、ほらやるぞ！
男1 めぐみちゃん…、
女2 こいつはよお、見ての通り引つ込み思案だからよお、お隣に誰か居ると本当の力が発揮できないんだよ、だから隣を走るんじやなくてお互い逆方向に走る事にしてくんね？
男4 はあ？お前何言ってるの？全然分かんねえんだけど、
女2 だあかああら頭わりいなあ、ここに線引くたろお？

女2、テープでラインを引く。

女2 んでここからスタートすんだよお互い反対の方向いて、んで一周走るだけだよ。
男4 なんだよそれ、普通と何もかわんねえじやねえかよ。
女2 そうだよ、だから言ってんじやねえか、
男4 てつきり俺はハンデでもくれてやんのかと思っただよ。
女2 ハンデなんか要らねえよ、松尾の方が足はええんだからよお、
男4 やってやるよ！おい早く位置につけよ。
男1 めぐみちゃん…、
女2 行くぞ、よーい、
男4 へん、お前立ったままかよ、だつせー、俺くらうちんぐだからな、はえぞ、
女2 どん！
男4、上手に走り去る。
女2、テープを上手に大きくずらす。
しばしの間。
男4、下手から走って来た。
男4 えー？！はあはあ、ウソだろマジで、えー？
女2 イエーイ、松尾の勝ち。
男4 あれ？え？…はあはあ、
女2 どうだ見たか松尾の実力。
男4 ちよつと、もう一回やらしてくれよ、なんか納得いかねえ、
女2 なんべんだつてやってやるよ、なあ、松尾？
男1 …え？
女2 今度逆な、逆。
男4 おう、俺もさう言おうと思っただよ、あとくらうちんぐはもつ

女2 よーい、どん。

男4、下手に走り去る。

女2、テープを下手にずらす。

男4、上手から走って来て、

男4 あれえー？えー？はあはあ、お前ウソだろ、えー、どんだけはええんだよ、

女2 どうだ見たか松尾の実力！

男4 …はあはあ、

女2 お前約束通りリレーの選手辞退しろよな、

男4 …分かったよ、しょうがねえ、俺より速い奴が居たんじゃな。松尾、リレー、頑張れよ。

男4、泣きながら去る。

女2 やったな松尾。

男1 凄い、僕こんなに足速かったんだ、信じられない…。

女2 うん、信じちゃダメだよ。

男1 よし、サッカー選手になる！

女2 バカ、勘違いすんな、お前私よりおせえじゃねえか。

男1 ほらね田中、言った通りだろ（世界を確認するように周囲を見回す）。

女2 松尾、

男1 はい。

女2 バカ。

男1 バカじゃない。

女2 バカ。

男1 バカじゃない。やった、僕は初めてリレーの選手だ。

女2 なれねえよ。お前、運動会は風邪ひいて休む事になってるから。

男1 …え？

女2 もう帰るぞ、コウモリ飛び出した。

男1 え、なんで？休まないよ僕。

女2 せっかくガンデンの鼻っ柱へし折ってやったのにお前がリレーに出たらまた調子にのっちゃうじゃねえかよ、

男1 …え？

女2 お前はあいつより速いって事にもうなってるんだからお前、度とガンデンの前で走るなよ。

男1 …え、どういう事？

女2 そうだ、お前明日から松葉杖な。

男1 は？

女2 なんかの拍子にふらっと走るかもしんねえしお前の事だから使いつぱ。

男1 え、ちよっと待って、怪我してもないのに松葉杖なんかつかないよ。そんな事したら松葉杖の人に失礼だよ。

女3、【先生】の位置にやってくる。

男3、足跡J／【村井】の位置にやってくる。

女2 あーせいせいした、騎馬戦、ガンデンの上に乗ってえなあ（去る）。

女3 はい、じゃあ次はリレーの選手を決めますかね。えー、この前のスポーツテストの結果から考える

と…、

男4 （やってくる） すいません、僕、リレーの選手辞退します。

男2 （舞台を横切りながら） えー…？

男4 騎馬戦に出ます。

女3 …ん、どうした、岩田？

男4 僕の代わり、松尾君を推薦します。

男2 （折り返し） えー？

女3 …いや、でも松尾は…、この間のスポーツテストで、

女1、【妹】の位置にやってくる。

男1 愛ちゃん、お兄ちゃんね、リレーの選手になったよ。

女1 …カレー？

男1 うーん、リレー。

女1 リレー？

男1 うん、リレーの選手はね、運動会のヒーローだからね、

女1 黄色？

男1 ヒーロー。

女1 ひーろー。

男1 うん。まさか僕がリレーの選手になるとは夢にも思わなかったんだ。

女3 松尾？

男1 はい。

女3 やれるのか？

男1 はい。

女3 でもお前、この間のテストで五〇メートル九秒六なんだけど…、大丈夫か？

男1 はい。

女3 岩田、いいのか？

男4 はい、九秒六って事は、ボルトと同じですから。

女3 うんそれは一〇〇メートルだからな、こいつは五〇だから、

男4 はい。

女3 …ホントに大丈夫か？

男1 はい、僕、リレーやります！アンカーやります！

女3 …うーん、まあ、そうか、うん…。

男4と女3、去る。

男1 だからね、お兄ちゃん頑張るよ。リレー。

女1 カレー？

男1 リレー。

女1 リレーライス。

男1 それカレー。

女1 カレー。

男1 うん、じゃない、リレー。

女1 リレーライス。

男1 愛ちゃん、お兄ちゃんの事好き？

女1 …。

男1 頑張るよ、お兄ちゃん。

女1 カレー。

男1 カレーの方が好きか…。

女2、やってきて【めぐみ】で一旦立ち止まり、歩きます。

女2 松尾、お前マジでやんのか？

男1 だってリレーの選手だもん。アンカーだもん、責任重大。

女2 お前ホント知らねえぞマジで、

男1 何言ってるの、僕はあの岩田君に勝ったんだぜ。これからクラスの為に頑張らなきゃなあ、あー、

プレッシャーだぜ。

女2 じゃあいいよ、お前らよつと走ってみるよ。

男1、走る。が今の位置からけて動くことはない。

男1 な？

女2 何が「な」だ。のろま。バカ。

男1 うん、調子は良い。

女2 よし分かった、じゃあなあ、明日に向けてみそぎをする。

男1 みそぎ？

女2 身体を清めるんだよ。

男1 え？何それ？

女2 水だよ。頭から掛ける。

男1 今十月だよ、寒いよ。

女2 楽しんでみそぎになんねえたら、

男1 そんな神頼みなんかしなくても

女2 行くぞー。

男1 うー…！

女2 いーち。にーい。(と十まで数えていく)

男1 愛ちゃん、お兄ちゃんね、頑張るよ。凄いや、明日は。凄いんだよ、お兄ちゃんは。

男4 【岩田】、女3 【めぐみ】の位置にやってきて、

男4 おい、オトコオンナ、松尾は？

女3 松尾、風邪ひいて休みだよ。

男4 はあ？マジで？

女3 マジだよ。

男4 おーい何やってんだよこの大事な日に

男4、歩きます。代わりに男2が【岩田】の位置に入り、

男2 くそたわけがあいつバカ、どうすんだよりレー。

女3 知らねえよ、補欠用意しとんだろ。

男4、【先生】の位置にやってきて、

男4 村井(手招き)、

男3、先ほどからずっとダッシュを繰り返している。

男2 えー、なんだよ松尾…。

男4 (男3に) 今日はお前がアンカーだから、急な事で申し訳ないけど、岩田がどうしてもリレーに出る訳にはいかないって聞かないもんだから、補欠のお前にクラスの命運を賭けるしかななまってしまった。

男4、今度は【父】の位置へ、

男2 (代わりに【先生】に立ち) 先生からしたら松尾よりお前の方が速いんじゃないかと思っはいるが、あの岩田の推薦だから仕方ないっちゃあ仕方ない。頼むぞ！

男3、晴々と何かを言おうとするが、

女2 【めぐみ】松尾！お前大丈夫なのか…？

男4 どうしても行くって言うから…、

女2 ふらふらじゃねえかバカ…。

男1 …僕はね、ぼかあ、リレーの選手なんだぜ、

女1 カレー。

男1 カレーの、カレーの選手なんだ。ぼかあ、ぼかあ、カレーの…、

女2 もういいよ、寝てるよお前、

女3、別の位置(足跡K)に立つ。

女3 どうしたの松尾君？

女2 あ、少女時代。

足跡Kは【少女時代】だ。

男2 【岩田】風邪なんだってよ。

男4 先生、なんとか出してくれませんか？こんなにもやる気になっている松尾を見たことがないんです。

男2 【先生】うーん、でもですねえ…

男1 明日から、明日から、

女2 【父】明日からどうなってもいいんです、走らせて下さいって、うわごと言ってるんですよ。

男4 【岩田】松尾…。

男2 【少女時代】松尾君…。

男1 僕がやらなきゃ、僕がやらなきゃ誰がやるんですか！

男3、勢いよく手を挙げる。

女3 【めぐみ】誰でもいいよ、たかがリレーなんだからよお。

男4 【先生】そうですね、運動会ですから、松尾君はまだ五年生ですし、

女2 【岩田】よし行け松尾！走れ！俺の分まで走って来い！

男1 岩田君…、

男3 …。

女3 【岩田】お前は、この学校で、いやこの学区で一番速い小学生だ、俺が保証する！

男1 ぬん！

男4 【父】お願いします、先生！

男2 【先生】何かあつてはねえ、学校の行事ですし、

女2 【父】責任は全て私がとりますから、お願いします！

男3、男2に近寄るが彼はもう先生ではない。

男4 【先生】分かりました。でもホント、すぐに病院に行くように準備しておいてください。

男3 ……

女3 【父】松尾、お父さん、車用意して待ってるからな。

男1 愛ちゃん、お兄ちゃんね、走るからね、カレー、カレーに、カレーを、走るからね、見てね、

女2 …カレーカレー言ってる奴がまともに走れる訳ねえだろバカ何急にかっこつけてんだよ、かっこつ

けたってかっこよくねえんだからかっこ悪いだろうがバカこれだからダメだよなあその気になっちゃ
うんだよすぐ。

男4 村井、そう言う訳だからお前は「玉入れ」を頑張ってくれ、期待してるぞ。

男3 ……。

男1 愛ちゃんぼかあね、小学生時代もつとスポットを浴びる瞬間を君に見て貰いたいんだ。

男2 よーい、

男1 ぼかあ、かっちょいい兄ちゃんになりたいんだ愛ちゃん、勉強も出来て、運動も出来て、

皆(女1、男3以外) 松尾！頑張れ松尾！

男1 顔も整っていて、手足もすらすらとしていて、

女2 松尾！、バトン来たぞバトン！

男1 生徒会長になって、

女3 くらうちんぐなんかしなくていいんだよ！

男1 英語が喋れて、

皆 立てー！立つんだ松尾ー！

男1 人に優しく、それでいて強くたくましく、

皆 動けー！動け松尾ー！

男1 誰にでも自慢できるようなかっちょいい兄貴にさ！

皆 松尾ー！

男1と女1を残して皆居なくなった。

女1は、地面を(足跡達を)見ながら移動している。

男1はそんな様子を、なぜか満足気に微笑みながら見ている。

男2、【猫】の位置に一旦立ち止まり、

男2 松尾。

男1 んー？

男2 ちょっとは目、覚めたかい？

男1 参ったよ、風邪ひいちまった。

男2 なんともならんかったなあ。

男1 ま、風邪だからね、しょうがないよ。

男2 うん、なんでしょうがないのかが分かんないんだよ、だって君の世界なんだろう？

男1 まさか風邪までひくとはな、大したもんだ、うん。

男2 それひいちやうんだ普通に。

男1 風邪ってそういうものだろう。

男2 うん、だからそれを、その、なんていうのその、ぱーっと治したりさ。

男1 そんな事はダメだよ。ちゃんと寝て、薬飲んで、治すんだ。

男2 うんでも、わざわざ寝込まなくてもさ。

男1 風邪なんだよ？

男2 いやだからそれを、万能薬つてのがあつてだね。

男1 何言ってるんだい田中、僕がそんな事したら製薬会社で働く人の意味が無くなっちゃうだろう。人にはそれぞれ仕事があるんだ。ダメだよ。

男2 …ねえ君何やってんの？

男1 え？

男2 なんだろう、君の世界は、普通だな。

男1 普通じゃなくそうと思つたらいつでも奇天烈な世界に出来るんだ。でもいきなり奇天烈な事になつたら困るだろう君だつて、だからまたしないんだよ。

男2 僕からしたら君が奇天烈だよ。

女2 【めぐみ】、女3【少女時代】に立って、歩き出す。下校途中の様子。

女2 あれからずっと寝込んでんだよ。あいつのせいであいつのクラスのベチン、ほんつと何しに来たんだかバカ。

女3 でもみんな松尾君の事応援してたね、一体感あつた。

女2 まあ、終わってみれば松尾の運動会だったな、だつせーけど。

女3 でもどうして松尾君はあんなにリレー出たかったんだろ。

女2 さあ、あいつ訳分かんねえもんバカだ。

女3 めぐみちゃんはさ、松尾君の従姉弟なんですよ？

女2 そうだよ。

女3 従姉弟って結婚出来るの？

女2 従姉弟は、結婚出来ないんじゃない？

女3 そうか。

女2 おい少女時代

女3 なに？

女2 え、お前松尾の事好きなの？

女3 誰が？

女2 いやこの流れで他の人の話題だったら混乱するんだけど。

女3 ああ、

女2 うん？

女3 うーん、

女2 は？

女3 いや、うーん

女2 はつきりしんなあ…。【岩田】松尾、大丈夫かあ？

男4がやって来るが、何もすることはなく女3と歩き去つた。

男1 あ、岩田君。うん、だいぶいいんだよ。

女2 そうかあ。…残念だったなあ。お前の足の速いのみんなにみせてやれるところだったのになあ。

男1 しょうがないよ、これはっかりは。

女2 ひどいんだに、みんな、松尾は仮病じゃないかって、走るの嫌だからわざと倒れたんじゃないかって、おまけに俺まで嘘つき呼ばわりだよ。ひどいよな。

男1 それはひどいよ、岩田君はなんにも悪くないのに。ひどいよ。そしてごめん。

女2 悪いのはみんなだからさ、そうだ、来年さ、同じクラスになるか分かんねえけど、松尾せつてーリ

レーの選手になれよな。

男1 うん。

女2 そいで、すげーびつくりさせてやろまい。俺も頑張るからさ、お前すげーはええからな、頑張らな
いとな。

男1 岩田君…。

女1 お兄ちゃん、これなに？

男1 ああ、バツタ。

女1 バツタ？

男1 うん。

女2 妹？

男1 うん、愛ちゃん、岩田君。

女1 ガンデン？

男1 岩田君だよ。

女1 岩田君。

男1 岩田さん。

女1 岩田さん。

男1 ごめんよ、めぐみちゃんが仲良いからさ、あんな風な口のきき方になっちまって。

女2 そりやあダメだ、オトコオンナ二号になる。

男1 ヤダなあ。僕、最初は弟かお兄ちゃんが欲しいと思ってたんだ、

女2 (去りながら) お兄ちゃんはもう無理だよ。

男1 うん、でも愛ちゃん出てきたら、妹で良かったって思ったんだよ。

女2、去りぎわ、また男2の前でドンとやって去る。

逃げる男2。

女1 おー、すげー、すげー飛んだ。

男1 うん、バツタはね、凄い飛ぶんだよ。バツタが人間の大きさをたら、二十メートルくらいまで飛
べるんだからね、

女1 二十メートル？

男1 うん、ビルの四階くらいかな。

女1 どここのビル？

男1 どころかじゃなくてね、たとえばのビル。

女1 たとえばのビル？

男1 まあだいたい、そのくらいによくあるビル。

女1 よくあるビル？

男1 なにしる二十メートルだ。

女1 そのバツタは？どこに居るの？

男1 うん、居ないんだけどねそんなバツタ。

女1 ……？

男1 恐いね、そんなバツタが居たら。

女1 お兄ちゃん、

男1 ん？

女1 なんてそんな話をしたの？

男1 え？

女1 なんて、バツタが人間の大きさをたらつていう話をしたの？

男1 …いや、凄い飛ぶから、どれほど凄いのかって言う話

女1 …。

男1 分かりやすいかと思つてね、

女1 …ふーん。

男1 …愛ちゃんお兄ちゃんの事好き？

女1 …、好き。

男1 良かった。

女3【めぐみ】、男4【少女時代】にやってきて

女3 おい松尾、少女時代連れて来たぞ。

男4 どう？真合。

男1 うん、だいぶいいんだよ。

女3 お前いつまで仮病つかってんだよ早く来いよ学校。

男1 まだちよつとほおつとするんだい。

女3 いつまでも熟ある訳ねえだろたわけもの。サボり。サボリマン。

男1 どうしたの？

女3 少女時代がな、お前の好きかもしれないって、

男4 そんな事言っていないじゃん。

女3 好きかもしれないって言ってたじゃん。

男4 分かんないって言ったんじゃない。

女3 それ好きかもしれないって事じゃん。

男4 その好きが分かんないって言ってんの。

女3 だから喋ってみろって。

男4 何を？

女3 なんでもいいから喋ってみたらいいがね、バカが分かるで。

男4 あ、松尾君、これあげる。

男1 なに？

男4 パン。

男1 ああ、給食の。

男4 あとマーガリン。

男1 ああ、給食の。

男4 ねえ松尾君さ、名字なに？

男1 …名字？

女3 ねえ、愛ちゃん、お兄ちゃんバカだよ。

女1 うん。

男1 めぐみちゃんがそういう事はつかい言うから愛ちゃんが僕の事をバカにするんだろ！もうやめてくれよなそういうこと言うの！

女3 だってしょうがないじゃん、バカなんだで。

男1 人がバカかどうかは他人が決める事じゃないだろ！

女3 はあ？じゃあお前が決めるの？

男1 そうだよ。

女3 じゃあバカなの？

男1 バカじゃないよ。

女3 ほらそうやって言うに決まってるじゃん自分で決めたら。

男1 だからめぐみちゃんが愛ちゃんに僕がバカだみたいいに決めつけて言うから愛ちゃんも僕がバカだっ
て思っんであつて本当は僕はバカではないし愛ちゃんだって僕のことバカじゃないって思ってたはずだ
もん最初は。だって最初は愛ちゃんバカって言う言葉も知らない訳だし産まれた人が最初から人を見て
バカって判断するってよっぽどの知性の持ち主だし、そもそもバカって言う言葉の意味を教えたの誰？
めぐみちゃんでしょう？それを僕の代名詞みたいにしたのめぐみちゃんやめてそういう風に愛ちゃんに
接するの。

女3 すげー怒ったなあ、見た？今の顔。バカに対して敏感って事は自分をバカだって気づいてるって事
なんだよバカ。

男1 貴様！僕は許さないからな！今度愛ちゃんの前で僕を愚弄した場合はもう本当にもういくらめぐみ
ちゃんだろうし僕は許さないからな！

女3 許さないってなんなんだよ。

男1 許さないって言ったら許さないんだよ。

女3 だからなんなんだよ具体的に言ってみろよ。

男1 許さないんだから、もう許さないんだよ。

女3 ほらバカだろお。

男1 愛ちゃん、聞いちゃダメだよ！愛ちゃんはもうこれからキレイな言葉しか聞いちゃダメ！キレイな
物とか景色とかキレイな人達にしか会わせない！

女3 どこにあるんだよそんなとこ。

男1 だから…

男4 めぐみちゃん、松尾君も、これはただの子供の喧嘩だからさ、本気で怒っちゃしょうがないんだか
らね。

女3 どこにあるんだよ！

男1 北海道とか…

女3 ほら、やつぱバカだろお。

男1 もういい！もう帰って！もう帰って！

女3 もう行こう少女時代、こんなバカ相手にしとつてもしょうがない。

男4 松尾君、学校、来やあよ。

男1 愛ちゃん、これは名古屋弁だからね、日本で一番汚い言葉だからね。お耳塞いで。

女3と男4、去って行った。

入れ替わりに男3やつてきて、足跡L／【駅員】になり、指さし確認をしている。

女1 お兄ちゃん、どこ行くの？

男1 お散歩。

女1 いーち、にーい、さん。出来た、帰ろう。

男1 愛ちゃん、愛ちゃんはさ、これからはお兄ちゃんの言う事とおく聞いてね、そうしたら愛ちゃんは

素晴らしい人間になるからね。

女1 素晴らしい人間？

男1 うん。

女1 …。

男1 愛ちゃんは、大人になったら何になりたい？

女1 仮面ライダー。

男1 ほらね、ダメなんだよ、そんな事言っちゃ。それはめぐみちゃんの影響だ、あの女は頭の回路がどうかしているからそういう事しか言えないんだ。ダメだからね、もうめぐみちゃんの言った事は忘れてね。

女1 シュインシュイン

男1 愛ちゃん

女1 シュインシュイン、

男1 愛ちゃん、どうしても仮面ライダーになりたかったらお兄ちゃんがどこかで仮面買ってあげる、それでオートバイ乗ったらそれが仮面ライダーだから、それでいい事にして。ここだけの話、この世界は

お兄ちゃんの手の平の上に乗っているんだからね、これ内緒だよ。本来ならば愛ちゃんを仮面ライダーにすることだって可能なんだ。だけどそういう非現実的な世界にはしたくない。だって仮面ライダー居るって事はさ、最低でもその三十倍は敵が居るんだよ。怪人がさ。愛ちゃんライダー、そんなに戦えるかい？ほほ毎週敵と戦わないといけなくてさ、それはきつと凄く大変だと思うよ。毎週日曜日、どこにも行けないよ。愛ちゃんはさ、もつと他の、なんだろう…、そうだ、なんか珍しいお花とかを集めるさ、世界中を旅して、そういうなんかそういう女の子になって貰いたい。その為にお兄ちゃんの言う事聞いてね、そうすれば必ず幸せになれるんだから。はい、分かりましたか？

女1 …。

男1 お兄ちゃんが愛ちゃんに幸せな世界を見せてあげるんだからね。はい、分かりました？

女1 はい。

男1 よし。その証拠にお兄ちゃんほじこへ行っても恐くない、この世界中どこへだって行ける。お兄ちゃんの世界がお兄ちゃんに危害を加えるはずはないからね。

女1 お兄ちゃん、お腹空いた。

男1 よし、じゃあ駅弁を買ってこよう。お兄ちゃんは駅弁だつて買えるんだぜ。

女1 お父さんは？めぐみちゃんは？

男1 うん、だからもうあの二人は出てこないよ。

女1 お姉ちゃん？

男1 おばちゃんも、先生も、少女時代ももうみんな出てこないよ。あんなどうしようもない脇役の出番は終わりさ。これからは愛ちゃんとお兄ちゃん素晴らしき物語が始まる。よし、お弁当買いに行こう。

女1 愛ももついい。

男1 え？

女1 いい。

男1 …愛ちゃんは、主役だからね、大丈夫なんだよ。居なくなることは絶対ないから安心して。

女1 …。

男1 愛ちゃんは「もういい」とか自分で言っちゃダメなの。決められないの愛ちゃんは。

女1 あ、鳥そぼろ弁当。

男1 うん、これにしよう。

男2、通り過ぎながら、

男2 鳥でぼろ弁当、二つで十二ゴールドなり。

男1 十二ゴールド。：お金、稼がないとな。

男3、足跡M／【車掌】に移動して、切符の確認などしている。

女1、窓の外を見る。

男1 何見てるの？

女1 …すごい、金色に光ってる。

男1 「光ってる」。

女1 「光ってる」。

男1 綺麗だねえ、なかなか見れないねえ、こんな景色。

女1 夕陽？

男1 うん。

女1 この後赤くなるの？

男1 そうだね、赤くなるよ。

女1 凄。今は金色。うわー。

男1 愛ちゃん、夕陽がなぜ赤くなるか知ってるかい？

女1 知らない。

男1 どうしてか教えてあげよう。

女1 いい。

男1 でも知っておいた方がいいよ。

女1 はい。

男1 愛ちゃんから見ると、太陽は今低い位置にあるだろ。

女1 うん。

男1 そうすると、太陽の光は、大気層を通るのが、長くなるの。

女1 うわー、なんだろ、全然分かんね。

男1 「分からない」。

女1 「分からない」。

男1 太陽の光は、地球の大気層を通って来るんだよ。

女1 うん。

男1 太陽が真上にある時は、薄いんだけど、横になると分厚くなるだろ。

女1 へえー、分かった。

男1 分かってないだろ。

女1 うん。

男1 よし、絵に描いて説明しよう。

女1 いい、なんかもうすげーめんどくせえ。

男1 めんどくさくないだろ。

女1 めんどくさくない。

男1 いいかい？

男3が近づいてくる。

男1 車掌さんだ。(女1に)切符は持ってる。

男4、やってきて、どこか位置にも立ち止まらず話し掛ける。

男3は去る。

男4 君達、小学生かい？

男1 はい。あ、いいえ。

男4 ん？

男1 この子だけが小学生です。僕はもう中学生なのです。

男4 どこまで行くの？

男1 …おばあちゃんち。

男4 二人だけで？お父さんお母さんは？

男1 あ、大丈夫です。

男4 偉いなあ、二人だけでおばあちゃんちか。よし、みかんあげる。

男1 ありがとう。

男4 気をつけてね。

男1 はい。

男4、去る。

男1 優しいおじさんだったね、みかん貰った。

女1 お父さん。

男1 あれはお父さんじゃないよ、似てるけど。そもそもお父さんが誰かというのもお兄ちゃんのさじ加減だからさ、言うなれば全ての人がお父さんだし、お父さんなんて居ないのと同じの事なんだ。

女1 バカじゃねえの。

男1 「バカじゃないの」。

女1 「バカじゃないの」。

男1 よし。違う、バカじゃない。お兄ちゃんは、バカじゃないよ。

女1 バカじゃない。

男1 バカとか言っちゃダメ、人の事をバカと言う人がバカなんだからねこれからは。これからの世の中は。

女1 バカという人がバカ。

男1 そうだよ、だから言っちゃダメバカなんて。

女2、やってきて、どこにも立ち止まらず、

女2 バーカ。

女1 あ、めぐちゃん。

男1 めぐちゃんは居ないよ、この人の方がバカなんだ。さあ食べようお弁当。

女2 君達、幾つ？

男1 ……

女1 (指を二本立てる)。

女2 二つ？

男1 小学三年生です。僕はもう中学二年生になりました。

女2 どこまで行くんだい？

男1 おばあちゃんちですけど。

女2 おばあちゃんちは、どこなの？

男1 岐阜です。

女2 岐阜のどこ？

男1 うんと、内緒です。

女2 そう、知らないの？バカだから。

男1 知ってます。ただ知らない人に我らの行き先を教える程無防備な人間ではないのです我らは。

女2 ああ、そう。

女1 めぐちゃん。

女2 ん？

女1 おうち帰りたい。

男1 めぐちゃんじゃないよ、話し掛けちゃダメ。

女2 でも今からおばあちゃんち行くからね。

女1 めぐちゃんも？

女2 うん。

女1 お父さんも？

女2 そうだよ。

女1 やった。

男1 ……？

女2 君を、幼児誘拐の罪で逮捕する。

男1 ……え、めぐみちゃん？

女2 警察だ。

男1 ……え、なんで居るの？

女2 なんで居るのじゃねえよ、ずっとついて来てたんだよお前の事だどうせバカな発想しかないんだからバカ。

男2、【父】に立ち、

男1 ……ええ？

男2 まあ、男の子ですし、(去る)

女2 お前何勝手に電車乗ってんだよ愛ちゃん連れて、よお金あつたなそいで。

男4 愛ちゃんまで連れて！何考えてるの！

男1 さっきの人、みかんくれた、あれお父さん？

女2 なんにも考えてないんだよなあ、松尾？

女2 そうだよ、お前ホントひでえな、泣くぞお父さん。

男4 ホント心配したんだからね！(顔を覆ってしゃがむ)

男1 ……

男1 ……めんなさい。お父さん。と伯母さん。

女2 愛ちゃん、お兄ちゃんいよいよだよ。

女1 いよいよ。

女3、足跡N／【祖母&祖父】にやってきて、手を振っている。

女2 いよいよダメになってきたよ。

女1 いーよいよ。

女2 おじいちゃんとおばあちゃんだ。

女2 そうか、ま、いつか。

女3 おー、めぐみ、大きくなったなあ。

男1 え、みんなで行くの？おばあちゃんち？

女2 なつとらんよ別になつとらん。

男4 (やって来て) そうだよ。

女3 松尾も、背伸びたか？

男1 ……お父さん。

女2 伸びとらんよちつとも伸びとらん。

男4 家出か。

男4 こんにちは。

男1 ……

男1 こんにちは。

男4 よく電車乗ったな、大したもんだ。

女3 はい、こんにちは。愛ちゃん。

男1 ……お年玉のお金、ずつととつてあつたから。

男4 そうか。

女1、女2の奥に隠れる。

女2 おかしーん、居たよ、松尾。

女3 ははは。

女3、慌ててやってくるが、ただ通り過ぎていった。

女2 忘れてまった？おじいちゃんとおばあちゃん。

男4 【伯母】松尾、あんたいい加減にしなさい！何考えてるの！なんかあつたらどうするの？お父さんがどんだけ心配したか、あんた分かつてるの！愛ちゃんまで連れて！いい加減にしなさい！【父】お義

女3 だんだん、お母さんに似て来たなあ。

姉さん、もついでですから。【伯母】何考えてるの！

男4 迎えに来んでも良かったのに。

女3 途中で「とんちゃん」買って来ようと思ったんだわ。

女1 ……おばあちゃん？

女3 なんだい？

男3、やってきて足跡〇／【犬】に。

女2 そんなもん電話してくれや行ったのに。クマまで連れて。

男3 (ニヤツと笑う)。

女2 クマ幾つになった？

女3 ひとつ。

女2 は、何があ？

女3 クマ。

女2 違う違う、歳。

女3 まあ、おばあちゃんだわ、クマも。

男3 (ニヤツと笑う)。

女1 …おじいちゃん？

女3 なんだい？

女1 ……………！

女1、慌てて女2の背後に隠れる。

女3 愛ちゃん、大きくなったなあ。

女2 松尾？

男1 ……。

女2 何ぼけつとしてんだよ、行くぞー。

男1 おかしいんだ、僕の思った通りにならない。ここからはまだ見ぬ世界へ旅立つはずだったのに愛ちゃんと一緒に、めぐみちゃんとかもう出てくれない予定だったのにどうして？

女2 知らねえよバカ、早く乗れよ。

男1 バカという人がバカなんだからねこれからの世界は。

女2 始まったよバカの理屈。

男1 岩田君に会いたいよお、僕の唯一の親友であるところの岩田君に。僕が岩田君に会いたいと望めば会える事になっているんだ本当なら。

今、男4は【岩田】の位置に立っていて

男4 お前ホントいい加減にしろよ、みんなに迷惑掛けてんだぞ。

男1 伯母さんじゃ分からないよ僕の気持ちなんて。

男4 俺にだって分かんねえよ。何をちやちやと周りのせいばかりしてんだお前。世界がお前を助けてくれるんじゃないぞ、お前が世界を助けるんだよ。お前はあんだけ足はええんだ、自信持てよもうちよつと。

他の人は居なくなっている。

男1 …あれ、岩田君？

男4 なんだよ？

男1 わ、岩田君だったの？

男4 は？

男1 僕はてっきり伯母さんかと思って、

男4 なんで俺がお前の伯母さんなんだよ。

男1 うん。

男4 お前ホントしつかりしてくれよなあ。

男1 岩田君、なんでこんなところに居るの？

男4 実はな、俺、転校すんだ。

男1 ……え？！

男4 夏休みが明けたらこっちの学校通うんだ。

男1 そうなの？なんでそんな急に…

男4 大人には関係ねえんだよ、子供の都合はさ。

男1 ……そうなのか。

男4 でもお前、こうやって夏休みになったら遊びにくんだろ？

男1 うん、来るよ、また来る。お正月も来るよ。

男4 じゃあ、遊べるな。

男1 うん！

男4 こっちは川の水キレイだからな、釣った魚食えるぞ。

男1 うん。

男4 …今年こそはお前とリレーで勝負出来ると思ったのになあ。

男1 …ごめんね、運動会が近づくと、めぐみちゃんが僕に水を掛けるから、

男4 そんな神頼みなんかしなくていいのにな。

男1 そうだよな、おかげで毎年ひどい風邪だ。

男4 お前はええんだから、なんにもしなくてもま。

男1 岩田君こそ、どんどん速くなってるじゃんか。僕、もう勝てないかもしれない。

男4 よし、じゃあ久しぶりに走るか？

男1 お、やるかあ。

男4 やるまい。

男1 よーし、いっちょやってみるか。

男4 行くぞ、運動場。

男1 岩田君の通う学校？

男4 そうだよ、下見も兼ねてな。

女3が足跡P／【名もなき中学生1】に、男3は【村井】にやってくる。

女3 お前か、名古屋で一番足の速い中二つてのは。

男4 誰だお前ら。

女3 俺達に名前はない。

男4 なに？

女3 今からお前は、そんな名もなき中学生に負けるんだ。

男1 …え？

女3 ねえ岩田さん、名古屋で一番速いってのはどれくらい速いのか、俺達に教えて下さいませんか？

いでしょお、岩田先輩。

男4 お前ら、この学校の生徒か？

女3 そうだよ、一応。

男1 岩田君、もう帰ろう。この子たち不良だよ。こんな悪い子たちの居る学校やめときなよ。

男4 いいよ、やってやるよ。

男1 岩田君

男4 何心配してんだよ、あいつら一年坊主だぞ。大丈夫だよ。どっちだ？(男3を見て)あいつか？

女3 あいつは俺達の中で一番速い村井だ。

男1 村井…？

男4 じゃああいつだな。

男4、足で線を引く。

男3、相手になろうとする。

女3 ちげーよバーカ。お前と走るのは俺達の中で

女3、足跡D／【名もなき中学生2】へ移動。男2が【名もなき中学生1】の位置に。

男2 一番足の遅い奴だ。

男4 なに？

男1 岩田君、村井君って、村井君ってさ…

女3 どうも、こにやにやちわ。

男4 いつの時代だ貴様、しかも女じゃねえか。

男2 それ女性蔑視ですよ岩田さん。

女3 岩田先輩、よろしく(握手を求める)。

男4 ふざけんなよこの野郎、

男1 岩田君

男4 さっさと位置につけよ、てめえら全員膝小僧スルむけにしてやつからな。

男2、なんか緊迫感のあるメロディを口ずさむ。

男4と女3は線を挟んで反対向きにクラウチングスタートの構え。

男1 は、こ、この形は！

男2 (メロディの合間に) お前逆だよ、それ逆。

女3 は？あたし、こつちがいいんだけど。

男2 すいませんね、俺達あんたみたいな都会の中学生とは違うんで、こんな綺麗な運動場で走る事滅多にないんですよ。

男2が喋っている時は女3がメロディを口ずさみ、なんとかして二人でメロディを続ける。

男4 学校来たらいいじゃねえかよ。

女3 高貴な人間は、学校みてえなんこ行かねえんだよ。

男2 こいつ時計回りとか知らねえんでけすよ、時計見たことないから。

女3 見たことくらいあるわ。

男4 いいよこのままで、お互い逆向きで走つても距離はおんなじだ。

男1 岩田君

男4 懐かしくて良い気分だよ。

男2 位置について、よーい…、どん！

二人、走りだす。

男1、岩田を目で追う。

男2 かー、おっせ。

女3の戻って来るはずの方向から、女2が走って来た。

男2 お前おせえよ。

女2 【名もなき中学生2】うるせえ、また七割だよ。

遅れて男4が戻って来た。

男4 ……！

男2 あれ？随分遅いですねえ、岩田さん。

男4 …ウソだろ。

女2 ウソじゃねえよなあ？(男1に) お前見てたろ？

男1 岩田君…、

男2 流しました、途中？

男4 ちよつともう一回やらしてくれ、油断した。

男2 だからダメだよ女性蔑視は、岩田クン。

男4 もう一回、やらしてくれ。

女2 しょうがないなあ、先輩の頼みは断れないなあ。

男2 位置について、よーい、どん。

走る二人。

女3が戻って来る。

だいぶ遅れて男4戻って来る。

男4 ……！

男2 大丈夫ですか？なんかさつきより遅くないですか？

女3 【名もなき中学生2】これあたしが速くなったのかも知らない。

男2 お前一番おせえくせにたわけ。

男4 はあはあ…、

男2 あ、もっと遅い奴がここに居た。

男1 岩田君？

男2 なんだ、名古屋で一番も大した事ないなあ。

女3 だから言ったが、都会なんて情報量の差だからね所詮

男2 おー、あいてーの風が吹いとる。

男4 もう一回、もう一回だけやらしてくれ…、

男2 もーやめときなよ岩田君、岩田、みつともないよ。

男4、スタートラインに、

男1 岩田君

女3 なんかく久しぶりにノロマと走ると調子上がるわ。

男2 お前は見下して成長するタイプな。

男4 早くしろこの野郎…！

女3 息上がってるじゃないすか、ちよつと休憩した方が、

男4 うるせえ早くしろ、てめえの膝小僧スルむけにしてやつからな…！

男1 岩田君…。

女3 じゃあ、本気出しますね。

男2 よーい、どん。

走りだす二人。

女3がまた下手に走り去っていかないにも関わらず、男4の先から女2が走って来る。

男4 ……………！

男1 は、速い！速すぎる…！

男4、途中で走るのをやめてしまつ。

男2 おー、速い、今の速いわ。

女2 【名もなき中学生2】だから言ったろ、あー、どンドン調子上がってるわ。今なら村井とやっても

勝てるかもしない。

男2 お、やってみるう村井？

男3、微笑み、一歩踏み出そうとする。

女2 やっぱいいや。

男2 あ、そう。

女2 せつかくだから気分長く終わりたい。

男1 …岩田君？

男4、足を引かず、

男1 岩田君？

倒れる。

男1 岩田君！

男4 ダメだ、足の肉が離れちまつた。

男1 に、肉が！肉が、離れた？…！！

男4 ああ、立てない。

男1 そりゃあ、そりゃそつだよー肉が離れたんならそりゃ無理だよー！

男4 松尾、後は頼んだぞ。

男1 岩田君…、

男4 こいつらマジはええ…。なあ松尾、世界は、広いなあ（目をつむむ）。

男1 岩田君…、岩田君！岩田君…！！

男2 いいか良く聞け！俺達は「名もなき中学生」！貴様ら有名中学生を肅清する為やってきた。我々は逃げも隠れもしない、いつでも君達の挑戦を待っている…とー！

三人 その場でジャンプする。

女2 【めぐみ】、男2 【猫】、男3 【犬】へ移動

女2 そいで何？勝負する事にしたの？

男1 岩田君の仇は、僕がとる！

女2 無理だろそれは。

男1 (空に向かって) 岩田君！岩田君！

女2 あの岩田がなあ、そんな速いの？

男1 速い。この僕が言うんだから間違いない。

女2 お前さ、いい加減気つけよ。

男1 「名もなき中学生」恐るべき集団だ。一番遅くてあれなんだからあの村井って奴は…、あ、めぐみ

ちゃん知らない？村井君って居たよね、小学校の時

女1、【妹】にやってきて

女1 おじいちゃん

女2 おじいちゃんここに居ないよ。

女1 ねえカブトムシどこ？

女2 そっちおらんかった？

女1 うん、全然おらん。

女2 おじいちゃんも？

女1 おじいちゃんもおらん。

女2 あれ？

男1 愛ちゃん、お兄ちゃんね、これから修行するよ。あの「名もなき中学生」って奴らは山の中を駆けずり廻って足腰鍛えてたんだ、だからあの脚力が出来たんだよ。

女1 はい。

男1 だからね愛ちゃん、お兄ちゃんもこれから駆けずり廻るんだ。凄いだろ？

女1 はい。ねえ、めぐちゃん、もう帰りたい。

女2 カブトムシはもういいの？

女1 うん。

男1 よし愛ちゃん、お兄ちゃんと一緒にお山のお山のお山まで行こうか。

女1 行かない。

男1 綺麗だよ、きつと。

女1 いい。帰って凍らせたヤクルト食べたい。

男1 ねえ愛ちゃん、愛ちゃんがカブトムシ捕まえたって言ったんだよ。

女1 うん。

男1 みんなも一緒に来てくれたんじやんか、

女1 もう帰ろ。

男1 わがまだまだそれは。

女1 だつて居ないから、カブト。

女2 【祖母】カブトムシはな、朝よおけ獲れるぞ。

女1 ほんと？

女2 明日、朝早く来てみるかい？

女1 いい。

女2 そおか。

女1 寝てたいから。

女2 寝てたいか。

男1 愛ちゃん、おはあちゃんがせつかく言つて下さってるんだよ。

女1 じゃあ行く。

女2 どつちでもいいよ。

女1 じゃあ行かない。寝てる。

女2 寝てるか。

男1 愛ちゃん、今日のうちに木の表面を少し削つておいてね、そうすると朝になれば樹液が出るからね、そこにカブトムシが集まるんだ。

女1 ふーん、帰ろう。

男1 愛ちゃん、

女1 ヤクルト食べたい。

男1 愛ちゃん、だからね、明日になれば簡単に捕まえる事が出来るんだ。その樹液に集まってカプトムシが群がっているからねきつと。

女1 気持ちわり。

男1 気持ち悪くない。

女3、【祖母&祖父】にやっつけてきて、

女3 おーい、

女2 【めぐみ】あ、おじいちゃん。

女3 おーい、

女2 ここだよ、ここ。

女3 おーい、

女2 ここに居るよ。

女3 イノシシ、おったる？

女2 イノシシ？

女3 【祖母】おったる？

女2 【祖母】じいちゃん、イノシシおらんよ。

女3 イノシシ、おったる？

女2 おらん。

女3 その辺にかかっとならんか、イノシシ。

女2 イノシシ、おらんよ。

女3 おらんか？

女2 おらん。

女3 イノシシ、おったる…？

女1 (女2に) ねえ見ておじいちゃん、綺麗だねえ。

男1 愛ちゃん、それはおばあちゃん。

女2 うん、綺麗だねえ。

女1 なんと綺麗な事でしょう。

女2 そうだねえ。

女3 イノシシおったる？

女2 おらんよ。

離れた所で警戒している猫と、追いかける犬の図。男2、逃げながら男4と交代。

途端 見失う男3。

女1 このあと赤くなるんでしょう？

女2 うん、なるねえ。

女3 イノシシ、

女2 おらん。

女1 その後、黒くなるでしょ。

女2 夜になるからね。

女1 そしたら、星が出るでしょ。

女2 うん。

女3 イノ

女2 おらん。

女1 星、綺麗？

女2 そりやあもう綺麗だよ、この辺りはもう、そりやあ綺麗だよ。

男1 愛ちゃん、星はどうしてまたたくか、

女1 知らない。帰ろう。

男1 地球の周りには大気の層があるから、

女1 また大気の層かよ、好きだねえお兄ちゃん大気の層

男4 【父】大気の層が好きなのか、松尾。

男1 あ、お父さん。別に、好きじゃないけど…、

女1 お兄ちゃん、今度から好きなものはカルピシやなくて、大気の層ね。

男1 コレ。

女1 あははは、

男1 こいつう、待てー(その場で走る)。

女1 あははは、

男1 あははは、

男4 こらこら、そんな走りまわると、

女1、寝ている男2に躓いて転ぶ。

男1 愛ちゃん！

男4 あーあ…、

男1 大丈夫かい？

女1 ぶわー！(泣いた)

男4 あーあ。

男1 愛ちゃん、ほら、手。

女3 ああ、(寝ている男2を見て) おったおった、ほれ、イノシシ。

女2 あれま、ホントだ。こりゃあイノシシだ。

女3 【めぐみ】わ、これイノシシ？でつか、おじいちゃん獲ったの？

女2 はっはっは。

女3 【祖父】じいちゃんはな、あのあれ、あのお、

男4 愛ちゃん、イノシシだつて、

女1 どれ？

女2 畏。

女3 そつ、畏。

男4 ほら。

女1 うわー…、汚ねえ。

男4 大きいなあ。

女2 逆。

男4 このイノシシ、どうするんですか？

女2 そら食べるんだわ、旨いぞお、シシ肉。

女1 げー、くせえ。

男1 死んでる、イノシシ…。

男4 凄いなえ、お父さんも初めて見た、こんな近くでイノシシ。

男1 岩田君…。

女2 さ、みんなで持つよー。

男4 うわー、

女3 ほれほれ

男1 岩田君…、

女2 【めぐみ】岩田君じゃねえ、持てよ早く。

女2、3、男3、4の四人で男2を持つ。

男1 愛ちゃん、イノシシ食べる？

女1 食べない、気持ちわりいで。

男1 そうだよね、ダメだよね、あんなの、

女1 うげつ、カップラーメン食おうぜ。

男1 うん、お兄ちゃんもそうする。あーあ、今日は嫌な夢見てうだ。

男2 (引きずられながら) 松尾、

男1 え？

男2 まーつおー、

男1 …岩田君。

男2 俺はこれから食われるんだなあ、

男1 僕は食べないよ、僕は、食べない！

男2 お前は食べなくてもこれから、この人達になあ、

男1 みんなー、岩田君を食べないで！お願いだから、岩田君をー！

男2 でもほつといたらどっちみちウジ虫に食われちゃうんだよなあ、

男1 そんな事言わないで！焼く、焼くよ。

男2 どうせ焼くなら、お前に食べて貰いたかったよ、俺は。

男1 分かった、食べる。食べるよ。

男2 足、食べてね、

男1 うん…、うん！

男2 速くなってね。

男1 岩田君！

男2 負けないでね。

男1 岩田君！旨い！岩田君旨い！

男4 静かに食べなさい。

男1 …、

女3 それくらい旨いんだわ、なあ？

女2 旨いなあ、イノシシ。やらか。

女1、黙って男1を見ている。

男1 愛ちゃんも、食べようイノシシ。

女1 要らない。

男1 美味しいよ。凄く。

女1 要らない。

男1 …そう。

女1 食べないって言ったクセに。

男1 だってあれは、岩田君だから、

女1 訳分かんねえ事言ってるじゃねえバカ。

男1 コレ、お兄ちゃんに向かって、なにその口。

女1 嘘つき。

男1 バカって言う人がバカなんだからね、

女1 嘘つき。

男1 食べないとき、逆に可哀そうなんだよ、イノシシ。

女1 嘘つき。

男1 イノシシ。

女1 嘘つき。

以降フツプのリズムで、

男1 イノシシ。

女1 嘘つき。

男1 イノシシ。

女1 嘘つき。

男1 イノシシ。

女1 嘘つき。

男1 イノシシ。

女1 嘘つき。

男1 嘘つき。

女1 イノシシ。

男1 イノシシ。

女1 いそぎち。

男1 いそぎち。

女1 いそつく。

男1 いそしし。

女1 うなしし。

男1 うなつき。

女1 うなつき。

男1 つん。

女1 うなつく。

男1 つくつくん。

女1 うなづく。

男1 うん。

女1 うなづく。

男1 うん。

女1 うなづく。

男4 同じく。

女1 野田塾。

女2 つくつく。

女1 うなづく。

女3 うちつく。

男4 おちつく。

女1 つくつく。

男2 つーん。

薄闇の中、男1の姿と儼かに女1の姿も見える。他は見えない。というか居ない。

女1 お兄ちゃん。

男1 美味しかったね、あの、アレ。

女1 じゃあね、さよなら。

男1 …え、どこ行くの？

女1 おやすみ。

男1 …ああ、おやすみ。

女1 さよなら。

男1 なんてそんな事言うの？

女1 寝たら、目覚めたらいいなあ。

男1 そりゃあ覚めるよ、朝になれば。

女1 本当の愛の目。

男1 ……ん？

女1 だってこれは、お兄ちゃんの世界なんですよ。だって愛の本当は別に居て、目が覚めたら本当の

愛が目覚めますんでしょ。そこにはお父さんが居て、お母さんが居て、

男1 愛ちゃん…そんな事無いよ？そんな世界有る訳ないじゃないか。誰がそんな事言ったんだい？め

ぐみちやんだろ、あの女はホントデリカシーの欠片もないからな。

女1 (囁く) お兄ちゃん、

男1 …なに？

女1 愛が寝たらさ、首絞めてね。

男1 …愛ちゃん、もついい加減にして、そういう事言うのホントやめて。お兄ちゃんが悪かった。悪か

ったからさ、そつだよお兄ちゃんだよ。そついう事言ったの、めぐみちゃんのせいにしてごめん。だ

からもつそついう事言うのやめるから愛ちゃんもやめて、お願い。なんか超怖いよ愛ちゃん。お兄ちゃ

ん今、鳥肌立つちゃつた。ほら、鳥

女1 早く帰りたいなあ、愛の本当のところ。

男1 …愛ちゃん、お兄ちゃんね、明日、名もなき中学生と戦うんだ。そうしたら、もしかしたらもつ戻

つて来ないかもしれない。だからさ、そんな寂しい事言わないで。

女1 なんて？死ぬの？

男1 うん、下手したら、岩田君と同じ末路を辿るかもしれないよ。

女1 食べられる？

男1 うん、肉が離れるからね、あれは危険だ。

女1 でも大丈夫なんですよ？お兄ちゃんの世界だから、お兄ちゃんの良いようになるんですよ？

男1 違うよ、そんな事ない。現実には上手くいかないことたくさん起こる。

女1 ……

男1 だからさ、応援しておくれよ。お兄ちゃんのかつちよいい姿、みせてあげるからさ、応援してく

れよ。

女1、去る。

男1 愛ちゃん、寝ちゃつたの？…寝ちゃつたか。

明るくなると、男4が【名もなき中学生1】に立っている。

男4 我々は名もなき中学生。思いがつた有名中学生諸君、君達は小さな箱の中の王者であり、その慢心は足元に目を向ける事をしない。知るが良い、お前程度の才能など近所に三人は居る事を。君が今立っている場所は、君一人の力で立っている訳ではない。傲慢な戦士は後ろから矢を射られる事を忘れてはならない。

女2、【めぐみ】にやってきて、

女2 あいつら言ってるのはただの妬みだ。評価されないのは周りのせいだつて決めつけてるただのクズだ。ああいう連中はなんとかぶつ潰してやりてえんだけじゃなあ。

男1 田中、僕はどしたらいいだろう…。勝つべきか、勝たざるべきか。

男2、【猫】にやってきて、

男2 なに悩んでるんだよ。君の世界なんだろ？なんでも君の思ったようになるんだろ？

男1 だってここで簡単に勝つてしまふと愛ちゃんにまた疑われてしまふ。愛ちゃんの為には今日の勝負、負けた方がいいのだけど岩田君の為には絶対に勝ちたいんだ。どしたらいい？勝つべきか、勝たざるべきか。

男2、適当にふらふらと去る。

女2 そりゃ普通にやったら負けるに決まってるんだろ。

男1 そうだよ、負けた方がいいよね？

女2 そりゃ勝った方がいいに決まってるんだろ。

男1 え？

女2 勝った方がいいに決まってるけど勝てないだろって言ってるの。

男1 いや違う違う、普通にやったらたぶん、いやまず間違いない勝っちゃうんだよ、でもどうすると愛ちゃんにはさ。

女3、【名もなき中学生2】にやってきて、

女3 お前ホントに岩田よりはええんだろ？

男1 本当さ、僕は岩田君に圧勝した男だ。

女3 へえー、そいつはすげえや…って事にはならないんだけどね、亀みてえにおっせーから岩田。

男1 貴様！貴様！

女2 【名もなき中学生2】お前なんて名前だ。

男1 松尾、みんなからはそう呼ばれている。

女2 ちつとも速そうに見えるのだけど大丈夫かお前？

男1 僕が本気を出したら、君達なんか全冒膝小僧スルむけだからな！いやその程度じゃ済まされない、骨だ、骨まで削れるぞ！

女3 【めぐみ】なんでお前はそんなに自信過剰なんだよ。

男3、やってきてウォーミングアップをしている。

男1 膝小僧が骨まで削れたらどうなると思っ？大人だ。膝大人だ！

女2 【めぐみ】お前は普通に走つたら名古屋で一番足が遅いんだよ。なんか手ないかなあ…、

男1 大丈夫さめぐみちゃん、僕は昨日岩田君の足を食べたからね、絶対に勝つ！

女1、【妹】にやってきて、

女1 そうよ、お兄ちゃんの世界だからお兄ちゃんが勝つに決まってる。

男1 ううん、お兄ちゃんの世界とか無いよ！愛ちゃんの世界も無い。みんな一緒の世界だよ。一緒に生きてるんだよ。だから誰か一人の思い通りにならないんだよ。

男2 (通り過ぎ) 松尾、勝つてよね。

男1 岩田君（上を向いて）僕は勝つ！

女1 はい。

男1 いや違う！どうしようめぐみちゃん！

女3 【めぐみ】お前昨日クマ連れて散歩した時だつてちつとも追いつけなかったらろ。

男1 ああ見えてクマは大だからね、犬が本気で走ったら人間は追いつけないんだからね、

女2 【めぐみ】ちっこい柴犬じゃねえかバカ。

男1 クマ。

男3、寄つて来る。

男1 お前は本当は足の速い犬なんだよな、僕が追いつけないんだから相当だよな。

男3 （何度もうなすく）。

男1 ほら。

男3、【村井】の位置へ。

女3 【めぐみ】はーあ、ここまでバカだとお手上げたな。【名もなき中学生2】よし、じゃあまたあたし

から相手してやるか。

男1 めぐみちゃんが?!

女3、足で線を引く。

女3 はあ？

女2 【めぐみ】はあ？

男1 あれ？めぐみちゃん？！どこめぐみちゃん、めぐみちゃんは誰？

女2 なんだよ？

男1 あ、めぐみちゃん？

女2 さて、どうするかなあ…。

男1 そうだよ。どうしよう。勝つべきか、勝たざるべきか…。

女3 おい、早くしろよ。

女3、スタートラインに、

男4 位置について、

女2 ちよつと待った、

女3 なんだよ？

女2 なあ名もなき中学生の二、確かにあんた速いよ。あんたくらい速い人見たこと無い。

女3 だろお？

女2 そんなにあんた速いのにさ、あいつより遅いの？

女3 …え？

女2 実はいつより速いんじゃないの？

女3 …いや、あいつはあたし達のリーダーだから、

女2 今なら勝てるんじゃないの？

女3 …。

女2 おいお前どうなんだよ？偉そうにふんぞり返りやがって、お前本当に速いのか？ちつとも速そうに

見えんだけど。

男4 …。

女3 …名もなき中学生リーダー、やつてみるか？

男4 名もなき者達よ、そいつの狙いは同志討ちだ。惑わされてはいけない。勝負の前に我々のスタミナ

を奪う作戦だ。

女3 あ、あつぶね、あやうく乗るところだったあつぶね、

男4 しかし、そんな程度で奪われるほど我々はやわなスタミナではない。バサ。

男1 は、リーダーがジャンパーを脱いだ…！

男4 ドサ。

女2 なんだあのジャンパー…！

男1 重りだ、重りが入っている…。

女3 まさか、あれを着てあいつはいつも走り廻っていたのか……！

男4 我々全員で勝負してやろう。そして知るがいい、いかに自分がちっぽけな存在か、そしてそんなちっぽけな存在を崇めている人々で構成されている街の、国の、世界のちっぽけさを。岩田より足が速いからそれがどうした？それが一体なんの価値がある？蟻の一步からしたら我々の一步は暗闇だ、暗闇が落ちてくるぞ。岩田はその暗闇の中を今も這いずりまわっているのさ。

男1 もう止めてよ！死者を愚弄すると天罰が下るんだからね！

男2 (通り過ぎ) 死んでないのです。岩田君は死んでないのです。ただの肉離れだからです。

男1 その天罰を下すのは僕だ。見てろ、貴様らみたいな僻み根性の塊は、世界のゴミ箱に入れてやる。

男1、クラウチングスタートの構え。

女2 おいおい松尾、お前もたいがいしろよ。

男1 めぐみちゃん、君にもみせてあげるよ、僕の本当の世界を。僕が勝つと言ったら勝つようになってしまつこの世の住人にはどうすることも出来ない世界の秩序って奴をな！

横並びに女3、男3、男4、クラウチングスタートの構え。

女1 よーい。

男1 そうだ努力だ、口だけじゃなく本当に努力すればいいんだ。ここで勝つても努力している姿を、歯を食いしばって血の汗を流せばいいんだ。そうしたら愛ちゃんだつて分かってくれる。作りものだろうがそれでなかるうがこの世界は現実だつて事が。

女1 どん！

と、ほぼ同時に一步を出す完璧なスタートを切る「名もなき中学生」達
その姿勢でストップモーシヨン。

静寂。

男1はまたようやく立ち上がったところで、ゆっくりと足を動かしている。その場で。

男1 速い、さすがに速い「名もなき中学生」。しかし僕は岩田君とやった時、走った感覚も無いまま走り、そして勝った。走らずに走る。それは飛んでいるかのようです。武豊はディープリンバクトの走りを「飛んでいる」と評したらしい。僕の走りを周りで見ている人もきつとそう表現するだろう「鳥だ、あれは鳥だ！鳥人間！鳥人間松尾、鳥尾！あいつはついに、鳥尾になった！」。

「名もなき中学生」達、ゴールを切る。

男1 みんな、耳を塞ぎ！きーん、それは耳鳴りじゃない、音速で飛ぶ鳥尾の羽根に切り裂かれた空気の音だ。耳を塞がないと鼓膜をやられるぞー！

女3 …(振り返り) おっそ、

男1 鳥尾が走った後は真空になる。そこに空気が流れ込む。それにより竜巻が起こる。校庭には鶏小屋が見える。あれはいけない。あんなトタン屋根ではすぐに吹き飛んでしまつ。

女3 まだ「こんなと」走つとる…。

女2 松尾…、おい松尾？

男1 案の定高く舞い上がるトタン屋根。金網が倒れ、鶏達が一斉に飛び出してしまった。鳥尾にとつて他人事ではない鶏。非常に申し訳ないと思いつつ鳥尾は足を止める訳にはいかない。真空を生み出すほどの脚力を持つ鳥尾の足だ、急に止まると無事ではいられない。背中にパラシュートをつけてスペースシャトルのように風の抵抗で止まれたらいいのだけどあいに今、パラシュートは付けてない。なんだあれは、百葉箱か。違うな、百葉箱は百葉箱であそこにある。そうか、あれが放射能計か。こんな山奥の中学校にもあんなものが設置されているのか。鳥尾は大人になったら政治家になる事にしよう。愛ちゃんだけを幸せにしてもそれは真の幸せではない。愛ちゃんの周りを幸せにしないと愛ちゃんだつて幸せではないのだ。

女3 (男1の台詞にかぶつて) なんだよコイツ、おい、おい！

男1 鳥尾は上空から世界を見ている。

女3 お前何やってんだよ。

男1 鳥、鳥尾…、

女3 お前さ、真剣に走ってくれん？

男1 飛ぶように走り…、

女3 おい！

女2 ……これ、真剣なんです。

女3 お前マジでむかつくわ、なんでこんなトロ臭い奴と走らないかんの腹立つわ。

男1 と、と、島尾ー♪

女3 聞いとんのか、おい！

男4 まあ待て、彼もまた、名もなき中学生の一人なのだ。

女3 ふざけやがって、あー、なんだこの不快感、なあ、街まで行こうぜ。

男4 行かないよ。俺達はここがいいんだ。行くぞ。

「名もなき中学生」達、去って行った。

女2 松尾？

男1 結果的にはこれで良かったんだ。愛ちゃんにはこの世界はなんの変哲もない、現実世界なのだという事を強く印象づけないといけないからね。上手くいかない事も沢山あるだろう、そのたびに挫折もあるだろう、だから面白いんじゃないか。

男1、未だにゆつくりとその場で足を動かしている。

男2 (通り過ぎ) ちりんちりん。

男1 (それが自転車漕ぎになる) お兄ちゃんはスーパーマンではない、世界を変える力もない、それでも頑張って生きて行くんだって言う背中をね、見せてあげられたらそれでいいんだ。

女2 松尾？

女1は男1を静かに見つめていて、

男1 ……(女1を見る)。

女1 ……かっこ悪。

男1 ……

女2 おい松尾。

男1 はい。

女2 どこまでついてくんだよバカ。お前あつちだろ。

男1 あ、いけない(漕ぐのをやめる)。

女2 もう置いてくからな。

男1 あ、うん。

女2 私、もうすぐ卒業するから。

男1 え？

女2 お前さ、いつまで大学生やるんだよ。ホントお前、先の事ちゃんと考えんといかに。

男1 僕はね、大学を卒業したら政治家になるつもりだから政治経済を今勉強しているんだ。

女2 相変わらず自信だけはあるんだよな…。あ、いつ？学祭、お前のバカだ大学は。

男1 あ、うんと、

男4、足跡Q／【学生1】にやってきて、なにやら太極拳みたいな動きをしている。

遅れて女3も足跡R／【学生2】にやってくる。同様に太極拳。女1もそれに加わる。

男4 再来週ですよ。

男1 再来週だって。

女2 同じじゃん。ていうかやるのかよ。バカが学祭なんかやっとする場合じゃねえだろ。箸で豆つかんだら入れる大学のくせに。

男1 ねえめぐみちゃん、僕はいいけど他の学生に聞かれないようにしてよね、夜道歩けなくなるよ。

女2 うちの学校、総理大臣来るよ。

男1 え、すげー。いいなあ、僕にとつて見ておかなきゃいけない人だ。

女2 卒業生なんだって。

男1 すげー。

女2 誰か知ってる？

男1 知ってるよ。

女2 誰？

男1 今でしょ？

女2 うん。

男1 ほら、中曽根。

女2 お前バカもいい加減にしるよ。

男1 海部。

女2 お前なあ、

男1 宇野。

女2 もっええわ。

男1 だってこころ変わるからさ。

女2 お前んとこ誰？

男1 誰だっけなあ、

女3 つぶやきシロー。

男1 つぶやきシロー。

女2 あ、そ。卒業生？

男1 ですか？

女3 だよ。

男1 だって。

女2 はいはい。

女2も太極拳に加わる。

男4 つぶやきシローってツイッターとかやってんのかなあ。

女3 え、知らないの？ 凄い人気だよ。

男4 あ、そうなんですか。

女3 だって本物のつぶやきだよ。

男4 ですよ。

女3 あ、松尾君、店長だからね。

男1 店長？

男4 おでん屋です。

男1 おでん屋？

男4 にしたんで今年。

男1 あ、おでん屋

男4 出店。

男1 ああ、出店。

男4 は？

男1 え？

女3 店長だからね、

男1 店長。

男4 ねえ、分かってる？

男1 あ、はい！

女3 二年が店長やる事になってるから、必ず。

男1 二年が店長、はい！

女3 松尾君が良いんじゃないかと思って。

男1 頑張ります！

女3 うん…。

男4 店長はね、検便しないかんのですよ。

男1 検便？

男4 検便。

男1 検便。

男4 …うん。

男1 はい、検便します。

男4 なんか、便の調子良さそうなんで松尾さん。

男1 はい、良いです。頑張ります。検便します！

女3 あのさ、

男4 はい。

女3 すげー繰り返すんだけどなんで？

男1 繰り返す？

女3 んと、言った事。

男1 言った事？

男4 うん、松尾さんさっきからほほ繰り返してるからね。

男1 え？

男4 繰り返してるから、ほほ。

男1 あ、ほほ？

男4 ほほ。

男1 ほほ？

男4 …は？

男1 え？

男3、足跡S／【警備員】にやってくる。

女3 あ、もう出ないかん。

男1 検便します！

男4 じゃあ松尾さん、よろしくお願いしますね。

男1 店長やります！

皆、帰り支度。

男2、いつの間にか【猫】に居る。

男1 愛ちゃん、お兄ちゃんね、店長になったよ。店長はね、二年のトップじゃないと出来ないんだって

さ、凄いだろ。

女1 …。

女3 (去りつつ) 大丈夫かなあ、松尾君。

男4 まあ、大丈夫ではないでしょうね。

女3 まあ言っても年上じゃん、敬語使うべきかすげー迷うんだよね。

男4 このままだとずっと二年ですよ松尾さん。

女2、女3、男3、男4、去る。

女1 …。

男1 頑張るよ、お兄ちゃん。これから、もつと、これから。

女1、男1を見るが無表情のまま去る。

男1 しばらく見なかつたけどどこ行つてたんだい。車に轢かれたのかと心配したじゃないか。

男2 …。

男1 田中？…田中？

男1 …そうか、大学生になった僕にはもう、猫の声は聞こえないか。

男2 んー？

男1 …あ、田中？

男2 あん？

男1 あ、田中じゃないの？

男2 なんだね。

男1 あ、田中？

男2 なんだよ。

男1 ああ、田中。

男2 今日は何んだかあつたかいなあ。

男1 うん、良い天気だね。

男2 この間ね、僕が住んでた家、取り壊しにあつてね。

男1 え？

男2 つかいマンションが建つたって。木造のさ、良いとどだったのに、今珍しい平屋でさ。これ
でまた冷たい場所が増える。

男1 どうするの、これから。住むところあるの？

男2 一応ね。

男1 うちに来ればいいじゃないかい加減

男2 僕が君の家の住人になる訳ないだろ。

男1 めぐみちゃん、ほとんど来なくなったよ。

男2 そういふ問題じゃないやい。プライドの問題だ。

男1 プライド？

男2 もう良い歳だからね、僕も。

男1 そうか、なんだか雰囲気変わったと思つたら君、歳とつたんだなあ。

男2 どうかね、君の理想の世界は、ちゃんと出来てるのかい？愛ちゃんは、幸せに暮らしているのかい？

男1 突然年寄りになるのやめてくれよ不安になるから。

男2 どうなんだよ。

男1 愛ちゃんはほら、今思春期だから、

男2 もう高校生か。

男1 そうなんだ、あの小さかった愛ちゃんが、もう高校生だ。

男2 君は今でもこれが、ゲームの世界だと思つてるのかい？

男1 え、どういふ事？思つてるも何も、そうなんだから仕方ないじゃないか。

男2 そっか。

男1 今が一番難しいかもしれない。まあ、だからこそやりがいがあるんだけどね。やっぱり骨がなくなっちゃいけないよゲームは。

男2 どう難しいの？

男1 僕があまりにも現実を意識するあまり、平凡な兄になつてしまつていふ。そのことで愛ちゃん、僕を、バカにしている風があるんだ。ハハ。なんにも出来ないかつ、悪い兄貴だつて思われてる。

男2 ダメじゃないかそりゃあ。

男1 今は我慢のとき、ここで僕が超人ヒーローになる事は出来るんだけど、これがひっかかんだ。そんな誘いには乗らないよ僕は。このままでいいんだ。きつといつか分かつてくれる。

男2 まだ見るかい？向こう側の世界を。

男1 たまにね。相変わらず工場で働いてる。偉いよ、僕は。

男2、大きな口を開ける、わりと長い時間。

男1 どうした？…田中？…田中？！

男2 ふあーあ。

男1 なんだあくびか、びっくりした。

男2 疲れが取れなくてね、最近。

男1 うちに来ればいいじゃないかよ。

男2 君の思う幸せと、僕の思う幸せは違うんだい。

男1 寒くなつて来たよ。

男2 君の理想の世界は、愛ちゃんが幸せに生きていける世界で、愛ちゃんが幸せに生きて行ける世界を作るには、その他の人も幸せにしないとイケないんだろ。

男1 そっだよ。

男2 その為に君は何をやつてるんだい？

男1 そりゃあいろいろやつてるよ、頑張つてるよ。

男2 うん。

男1 まるで何もやつてないかのよう、気づかれないように、そおつとやつてますよ。

男2 うん。

男1 レベルは高いよ、相当。

男2 …。

男1 とりあえずゴミ拾いだね。気が付いたら拾うようにしてる。自転車も揃える。

男2 ああ、そう。なんかボランティア集めて、とかではないんだ。

男1 そういふ事やつてる人は居るね。だからあんまり大々的にやっちゃうと、愛ちゃん敏感だから、ちよつとも油断するとね、また、繊細な心配りが必要なんだ。

男2 他には？

男1 困つてる人が居れば、そっちへ行って…、あの、宮沢賢治の、

男2 ああ、はいはい。

男1 ああいう、みたいな。

男2 なに？

男1 だからその、東に、その、なんかしてる人が居たら、その、何してるんですかって言って、その、西にまたなんか違うなんかしてる人が居たら、その人に、その、今度は何してるんですかって、言った、り、また北になんかそういうなんかしてる人が居たら、その、あなた今度は何してるんですかって

男2 まあそういう感じだね。

男1 そうだね。

男2 その人何やってんの東から西から、その話の、その、

男1 そういう事をしていきたいと思ってますよ。

男2 あ、まだしてないんだ。

男1 これから気づかれないように、何もなければのように、なにしろ。

男2 そうだね。

男1 うん。

男2 ……

男1 ……

男2 大変だ、それ。

男1 大変だよ。

男2 聞いてるだけで、うん。

男1 世界の平和を守っている訳ですから、僕は。

男2 うん。

男1 世界基準でやっていますから。

男2 だよな。

男1 基準じゃない、規模。

男2 ああ、規模ね。

男1 うん。

男2 ……

男1 ……

男2 何が面白いのこのゲーム。

男1 え？

男2 君さ、向こうの世界の君はさ、工場で働いて、昼間？んで帰って来て、このゲームをやってるんだ

男1 よね、何やってんの？

男1 ……

男2 ゴミ拾いなら、そっちでやっても良くないかい？

男1 ……それたぶん、向こうでも言われてるだろうね。

男2 現実と同じ事をやっただけじゃないと思うんだけどね猫的には。

男1 こっちは、愛ちゃん居るから。

男2 ああ…。

男1 うん。

男2 君は愛ちゃんに聞いた事あるかい？何が幸せか。

男1 ……え？

男2 君の望む幸せと愛ちゃんの望む幸せは、違つかもしれんぞ。

男1 ……

男2 もう君の望む愛ちゃんではないんじゃないのかい？

女1、やってきて、ぼんやり周りを眺めながら隅の方を歩いている。

男1 そりゃあ僕だつて愛ちゃんをお姫様みたいに着飾ってさ、お金持ちっていう設定にして、愛ちゃんあんな顔不細工だからさ、この先言い寄って来る男だつて居ないだろうし、僕が幸せにしてあげないと。最初は僕だつてもっととスーパーな兄でやって行こうとはしてた、けどそういう奇抜な事は愛ちゃん嫌うから。

男2 ほら昔あったじゃないか、ゲームで、今でもあるか、携帯とかでさ、変なキャラクター育てるゲー

ム、

男1 変なキャラクターってなに？

男2 動物ともモンスターとも分からないような

男1 愛ちゃんは変なキャラではない。

男2 だからゲームの話ね、

男1 うん。

男2 あれみたいなのに、やり直すこととか出来ないの？

男1 …何をですか？

男2 だから、最初から。

男1 …ん？やり、なおす？

男2 うん。

男1の視界に女1が入る。

男1 あ、愛ちゃん！ちよつとごめん、愛ちゃん！

女1 …。

男2 いろんな事考えるんだなあ、人間って（去る）。

男1 さ、ここだ。ここの席だよ。愛ちゃん窓側。

女1 …。

男1 さて、お弁当を食べよう。もうお昼の時間だ。

女1 …。

男1 今食べておかないと、夜は最後まで食べられないよ。愛ちゃんの好きな鳥をばら弁当だよ。

女1 …。

男1 本当に食べないの？お腹痛いの？

女1 …。

男1 じゃあ、お兄ちゃん一人で食べようかな。パカ。出た！、鳥をばら弁当だぜえ。

女1 ♪鳥はどうして飛ぶの。飛んで何をしてるの。上から見降りしフンをする。人は何をしてるの。産んだ卵を奪って。羽を抜かれ手足はもがれ肉は、バラバラ内臓をくおお、

男1 ねえその唄やめて。なあにその唄。愛ちゃん作ったの？凄いや、オリジナルでそんなの作れるなんて。なに？鳥をばら弁当買って来たのがそんなに気に入らなかつた？

女1 ねえ、

男1 なんだい？

女1 これ、どこ走ってるの？

男1 さあどこだろう？長いねトンネル。山の中かな。おばあちゃんちは山に囲まれてるから、もうすぐ

だねぎつと。

女1 ねえ、

男1 …ん？

女1 おばあちゃん、もうすぐ死ぬ？

男1 なんて言う事言うの？まだ死なないよ。だっておばあちゃん元気なもの。

女1 でも時間の問題でしょ。

男1 なに？死んで欲しいの？

女1 私ね、おばあちゃんが死ぬ時そばに居たい。

男1 お兄ちゃんも。

女1 でね、聞いてみたい事があるの。

男1 なに？

女1 「おばあちゃん、死んだらどうなるの？」

男1 そう、それを聞くの。

女1 …。

男1 おばあちゃんが、今にも死のうとしている時に、聞くのね？

女1 うん。

男1 そうか。答えてくれるかなあ。

女1 だって今のところおばあちゃんが一番近いんだもの。

男1 でもさ、分かんないと思うよ。だって愛ちゃんと話してるって事はさ、まだ死んでないんだからさ。

死んだらどうなるかは、死んでからじゃないと分からないんだからさ。

女1 死ぬ寸前なんだから死ぬ向こう側がちらっと見えるんじゃないの？

男1 ねえ愛ちゃん、なんかお兄ちゃん泣きたくなくなって来ちゃったよ。愛ちゃん怖い事言うから。怖い考

えだよそれは。

女1 私の予想ではね、

男1 また怖い事言うよこの子は。なに？

女1 おばあちゃんには本当はおばあちゃんじゃなくてね、お姉さんなの。

男1 …。何それ？怖いよ。ややこしい感じがするよ。

女1 お姉さんが作った世界ではおばあちゃんなの。お姉さんがおばあちゃんになった時のシミュレーシ

ヨンしてるのよきつと。

男1 おばあちゃんのお姉さんが？

女1 ……

男1 あのね愛ちゃん、そんな事言ったら、愛ちゃんもお兄ちゃんも、そのおばあちゃんお姉さんの作った世界に住んでるって事じゃんか。そんなのだからおかしな話だと思わない？だってじゃあお兄ちゃんの見えているこの世界はなんなの？お兄ちゃんはなんでいろいろ考える事が出来るの？

女1 それは人工知能。

男1 じゃあお兄ちゃんは、人間じゃないの？

女1 うん。

男1 もうね、泣くよ、いい加減にしないと。

女1 そういう世界の一つなんでしょ？あなたの世界も。

男1 ……お兄ちゃん、ね、お兄ちゃんですよ。

女1 ……

男1 ……あれ、愛ちゃん、どうしたの？最近そういう事言わなくなってきたのに、また復活しちゃった？なんか、あつた？

女1 おばあちゃんは、死んだらおばあちゃんじゃなくなる。やつとこの世界から抜け出せる。おばあちゃんの世界に帰れる。だってここはあなたの世界だものね？

男1 ……愛ちゃん、愛ちゃんがお兄ちゃんのことか？悪いって思ってるの知ってる。だからここはお兄ちゃんの世界じゃないって分かってくれたと思っただけで違ったのかな？そんなだってお兄ちゃんの世界な訳ないじゃないか。そしたらお兄ちゃん、もつとすげーことやってるぜ。こんななことない日常生活してないぜ。

女1 ……

男1 やれやれ、現実つてのは、厳しいよなあ全く。

女1 コンピューターの発達した現代では脳をデータ化して管理する事が可能になってるの。

男1 お、そういう漫画を読んだの？

女1 人間に魂は存在しない、脳で動いてるんだから、その脳は電気で動いてるんだから。

男1 お兄ちゃんだって愛ちゃんくらいの時はそれくらいの事は考えてたもんだよ。手塚おさむし読んだからね。

女1 電気で動いてるって事はね、

男1 ねえ聞いている？お兄ちゃんの事無視しないでくれよな。

女1 ……

男1 なに？

女1 人間の脳だって電気で動いてるって事は、それはもうコンピューターと何が違うのかしら？脳と同じ働きが出来るコンピューターは、それはもう人間じゃないのかしら？

男1 愛ちゃん分かった。お兄ちゃんね、おばあちゃんち行ったら、愛ちゃんと一杯遊んであげる。裏の山の中に入る。大きな鯉が居るからさ、金色の。それ今年こそ捕まえよう。

女1 それもデータだからね。

男1 ……

女1 金色の鯉が居た、というデータ。

男1 お兄ちゃん、愛ちゃんの口から「データ」とか聞きたくない。

女1 「メモリー」に「ロード」された「ログ」。

男1 ほら、お兄ちゃんの手を握ってごらん、あつたかいよ（手を出す）。

女1 （手を見て）気持ち悪。

男1 ……

女1 （顔を上げ）そんなもんプログラム次第でなんでもなるんだからね（手を見て）気持ち悪（顔を上げ）人間の記憶なんて本当にいい加減なものなんだから、息をぼろ弁当だつて美味しいと思ってるだけでホントは美味しくないんだからね、電気信号によつて普通のパン食べてるのにステーキ食べてるのと同じ事だつて出来るんだからね、いえもつとよ、実際は食べてないのに食べた事にも出来るんだからね、それは全部脳の仕業なんだからね（手を見て）気持ち悪。

男1、手をぐつと握り締め、うつむく。

男2、通り過ぎながら、

男2 やり直したらいいじゃないか始めから、リセット出来ないのかい？

男1 トンネル抜けたね。うわあ、すごい雪だ。ほら見て御覧、きれいだ？

女1 映画のスクリーンみたいなものでしょ、作られた景色でしょ、だいたいトンネルを抜けたと思って

も抜けないからね、トンネルなんか無いからね、そもそも動いてないからね、

男1 お弁当食べよつと、

女1 この世界が本物じゃないと確信したのはあなたのような兄が居るからよ。

男1 …え？

女1 本当の世界だったら私にこんなかつこ悪いお兄ちゃん居るはずないもの絶対。

男1 …お、そうか、そう来るか。全くどこまでレベル高いんだ、ハハ…。

女1 あなた私のお兄ちゃんだつて言ってるけどお兄ちゃんつていう設定になつてただけで私とあなたは本当は赤の他人だからね、

男1 お兄ちゃんお腹空いちまったぜ！愛ちゃん鳥を食べたくないならお米だけでもどうだい？お兄ちゃんが鳥を食べるぜ。

女1 出たな鳥食い。鳥食い鳥尾。鳥食い魔人鳥尾。鳥食いマシン鳥尾。マシン。マシン鳥尾。マ

男1 そらだトイレに行つて来よう！お兄ちゃんは、おしっこがしたいと思ってるんだ。誰に命令される訳でもなくおしっこがしたいと思ってるんだ。それだけじゃない、じつさいおちんちんから液体が出る。その液体のほとんどは水なのはどうして黄色いのか知ってるかい？

女1 私のお兄ちゃんがこんなかつこ悪いマシーンな訳ないじゃないの。私の本当の世界は別にあつてこはあなたが作つた世界で私はあなたの世界のいちキャラクターに過ぎないのよ。だけどそれはごめんなさい、私には受け入れることが出来ないのであります。

男1 いい加減にしる愛ちゃん！

男1、女1をピンタしようとするが今の位置からではまったく手が届かない。

男1 僕がかつこ悪いのは全部君のせいだつて言う事がなぜ分からないんだ！君は自分の顔鏡で見たことあるかい！そうしたらすぐ分かるよ君が僕の妹だつて事がな！

女1 すいませーん、おまわりさーん、この人私に暴力振るいます。私、この人知りませーん。

男3、足跡T／【おまわりさん】を残して去る。

男1 …僕はこの世界を頑張つて生きて行くつて決めたんじゃないか、初めから頑張つて行くつて決めて

たんじゃないか。途中でやり直すなんて、出来る訳ないじゃないか…。

女1 私の世界の本当のお兄ちゃんはずっともつとかつこよくて手足もすらすらとして世界を変える力の持ち主でそれをやり遂げる行動力があつて決断力があつて

男1 だからそれは僕なんだよ愛ちゃん！それ僕の事なんだよ、僕の事をそう見るように僕が設定したんだ。

女1 …。

男1 設定じゃない。小さいころからの言い聞かせ、洗脳。

女1 …。

男1 マインドコントロール。

女1 私気づいてたからね、

女1、歩きたす。地面をみながら、そこにあるいろんな位置を確認するかのようにつ。

男1 …愛ちゃん。愛ちゃん？どこ行くの？

女2、やつてきて【めぐみ】で立ち止まる。そこに四角く仕切られた照明が付いた。

男1 あ、めぐみちゃんだ。おはよう。

女2 おはよう。(去る)

女1 この人はめぐみちゃんじゃない。(こ)がめぐみちゃん。この場所がめぐみちゃんであつてこの人はめぐみちゃんだつたりめぐみちゃんじゃなかったたりする人。私、気づいてたからね。

男1 …訳が分からない、あれはめぐみちゃんだよ。

女1 めぐみちゃんだつたりめぐみちゃんじゃなかったりするめぐみちゃんね。

男4がやつてくる。【岩田】に立つと四角い照明が付く。

男1 岩田君だ。

男4 松尾、元気か？(去る)

男1 岩田君こそ、足、大丈夫？

女1 岩田君。お父さんだったり伯母さんだったりする人。

男1 ううんそうじゃないよ、言うなれば岩田君じゃないかもしれない岩田君だ。基本的に岩田君だから僕にとつての岩田君は岩田君だ。

女3 やってきて、【伯母】に立つ。照明が付く。

女3 松尾。(去る)

男1 伯母さん。

女1 おじいちゃん、おばあちゃんでもいい。名もなき中学生とか先生とか。

男1 君が小さいころからお世話になってるから伯母さんだけと伯母さんじゃないのかもしれない伯母さんじゃないか。

女1 役者さん。

男1 役者さんとか言いだしたなとうとう……！

男3、【村井】に入る。照明が付く。

男1 あの人は知らない。

男3、がつくりと肩を落とす。

女1 役者さんが役を途中で入れ替わったりしてやっていると世界。少ない人数で沢山の登場人物を演じる、

最近そういうの流行ってるからやってみた的な。

男1 愛ちゃん、愛ちゃん……

女1 あるいは集団で個を演じる事により「私」という自我の消失と解放を狙っているのかと思いきや、ただのモンスター。ペアレックス対策の学芸会的な発想だったり、

男1 何を言ってるんだ君は。あ、そうだ村井君だ。あれは足の速い村井君だったりそうじゃなかったりする村井君だ。でも村井君、結局どれくらい足が速いのか知らないまま。誰もが速いって言うから速い

と思ってるだけで実際は違うのか分からない。

女1 あの人は一言も台詞を喋らない。台本に書いてない事は喋らない役者さん。

男1 喋らない事はないよ、人間なもの。(男3に) ですよねぇ。

男3、【おまわりさん】に立って何かを言おうとする。

男1 あ、すいませんおまわりさん、いや、なんでもないんです、ただの兄妹喧嘩で、すいません。

女1 おまわりさんの位置。

男3が立っている位置に、照明が付いた。

男2、やってくる。

男1 田中だ。おーい、田中ー！

男2はそのままどこにも立ち止まらず、

男1 あれは田中。猫の田中。僕は猫と会話出来る。今のところ僕が発揮している超能力はそれくらい

だけと僕に超能力がある事を周りの人は誰も知らない。

男2 (女1に近寄り) 一人かい？

女1 道に迷ってしまいました。私は、道に迷ってしまったのです。

男2 高校生かい？

女1 さあ？

男2 どこ行くの？

女1 おばあちゃんち。

男2 そう、みかんあげる。(去る)

女1 ありがとう。

男1 田中あいつ、猫のくせになに愛ちゃんをナンパしてやがる。愛ちゃんみたいな不細工をよおナンパ出来るもんだ。

女1 私は今みかんを貰ったけど貰ってない。電車に乗っているけど乗ってない。歩いてないのに歩いてる。

女2、やってきて【祖母&祖父】に立つと照明が付く。

女2 愛ちゃん、

女1 はい。

女2 どこ行くの？(歩きます)

女1 おばあちゃんの位置。ここがおばあちゃん。あそこに行くためぐちゃん。ここに来るとおばあちゃん。おじいちゃんもここがおじいちゃん。おじいちゃんもおばあちゃんもほぼ一緒。長く一緒に居るとほぼ同じ位置になるらしい。先生。お父さん。岩田君。伯母さん。少女時代。バツタ。車掌さん。知らない誰か。

男1 愛ちゃん。ねえ、愛ちゃん？一人でどこ行くの？

女1 ここはお兄ちゃん。この人はお兄ちゃんじゃない人。ここがお兄ちゃん。お兄ちゃんじゃない誰か。誰か知らない人。(足元を指さし移動して) 知らない人。知らない人。人。人。人。

女1、以降ずっと「人、人、人…」と言っている。

地面には四角い照明が増えて行く。

他の人もやってきては、舞台上を通り過ぎていく。

男1 (足元を見つめて) お兄ちゃんの位置…？

男1の足元に四角い照明がついた。

男1 ここは僕…。僕はここに居るから僕…。ここじゃないと僕は僕じゃない。僕は一体誰なんだ。(見まわし) 僕の世界…。愛ちゃんの世界でもあるのかもしれない。もしかしたら他の誰かの世界でもあるかもしれない。それが現実かもしれない。じゃあ誰の世界…？

男3、先ほどから遠巻きに男1を見ている。

男1 僕も僕ではない誰かでもある。僕は僕ではない誰か。僕とは関係のない誰か。行動力があって決断力があって、世界を変える力の持ち主だ。

男3、ゆっくり男1に近づいてきて、不審な者を見るようにジロジロみている。

やがて、何かを言おうとすると、

次の瞬間、頭を押さえて倒れる。

女1 人。人。人。総理大臣。人。人。人。：

女3 【知らない人】…おまわりさん？…おまわりさん？！大丈夫ですか？！おまわりさん！(去る)

男4 【岩田】おい松尾。俺久しぶりに帰って来たんだ。…松尾？おい松尾？(去る)

男2 【猫】…松尾？お前その手…、何持ってるの？なあ、松尾？…お前何持ってるの？…なあ？おい、松尾！(去る)

女2 【めぐみ】あれ？松尾？お前なんでこっちの学祭来てんだよ。お前自分とは？丸かぶりじゃなかったっけ？おい、松尾？おい、どこ行くんだよ。おい。おい！(去る)

男1 僕は今、歩いている。まっすぐ。歩いている。

男1、歩きます。その位置には白い靴が脱ぎ捨てられている。そのまま去って行く。

しばらくして男3、立ち上がり、今まで男1が居た位置を見つめて

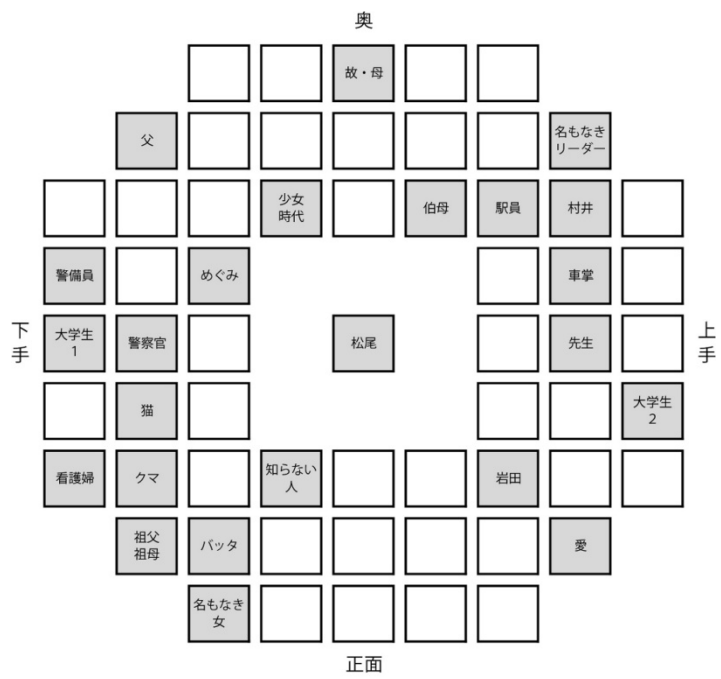
去っていく。

女1 人。人。人。人。人。人。人。人。人。人。：

と言いながら去っていく女1。

舞台には誰も居なくなつた。

地面には真四角の照明の明りだけが無数にあって、異様に明るい。



【上演記録】 2012年11月23日～25日 名古屋千種文化小劇場

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp